

ADULT ONLY
R18



おむっっ娘PARTY! 8

おむっっ娘プチオニリー『おむ☆フェス8』開催記念合同誌

おむつつっ娘PARTY!8

おむつつっ娘プチオンリー『おむ☆フェス8』開催記念合同誌







ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

ん
はぁ

おむつを外されて裸の格好で
ママにお尻ペンペンされながら
お漏らししちゃってまた
おむつを当てられて
しまいました・・・
描いた人
コンドル

○×4年度

にゆうえ



— 粗相が治っていない児童・生徒について、学区内の保育園への再入園を命ずる。対象の児童・生徒は入園する保育園の規則に従うこと。

20XX年。おもしろが治らない子を対象にした新法案、通称「落第教育」により、高校生にもなるかというのにいまだおもしろが治っていない佐藤美咲は高等学校への入学を取り消され、「落第園児」として近所の「むつき保育園」へと通いなおすことになってしまった。美咲はむつき保育園の制服をまとい、おむつをあてられて二度目の入園式を迎えることとなってしまったのだった…。

美咲「うう… 私、もう高校生になるのに…」

おむつの取れていない子はその年齢に関係なく年少組より下の「ちゅうりっぷぐみ」として扱われることとなる。「ちゅうりっぷぐみ」ではおむつの交換を行いやすくするために、スカートの着用をさせない、という「規則」があった。—そして、むつき保育園にはさらなる「規則」がある。

【上の組の子は下の組の子のお世話をすること】

きらら「これからはきららが『おねえちゃん』だね♪」

みさき「しかもよりによってきららちゃんがいるなんて…」

なんという星の巡りあわせか、むつき保育園には美咲の家の隣に住み、いつも美咲に元気よくあいさつをしてくれる年中組のきららという子が通っていたのだ。

きらら「もー！きららはきょうからひまわりぐみなのだね♪みさきちゃんよりもおねえちゃんなんだから『きららおねえちゃん』ってよんで！」

みさき「うう… わかりました…『きららおねえちゃん』…」

そして、下の組の子は上の組の子を『おねえちゃん』と呼び、『おねえちゃん』の言うことはきちんと聞かねばいけない。これも「規則」である。こうしたやり取りや、周囲の父兄の奇異の目からくるストレスからか、美咲は自分も気づかぬうちにおむつをじっとりと濡らしてしまっていた。

きらら「あ♪みさきちゃんおもしろししちゃったのね♪きららおねえちゃんがおむちゆかえてあげまぢゆから、ちゅうりっぷぐみのおへやにいきまぢょうねー♪」

みさき「うう…」

こうして、幼稚園児が落第園児をお世話をするという異常な日常が幕を開けるのであった…。



目次

<カラーイラスト>

- 3 ショタT督
- 5 コンドル
- 6 小金屋悠
- 8 蜜姫モカ

9 もくじ

<イラスト&漫画>

- 10 シュージ
- 11 瑞光ちのん
- 12 雛良
- 13 うみの爬虫類
- 14 日向あおい
- 15 Cashu
- 16 God Hand Mar
- 17 たく

<小説>

- 19 でんねこ
- 22 ラッセルヘッド
- 27 小林ゆーり
- 33 ビアード
- 40 平野月子

<フリースペース>

- 50 ジョン・マロ
- 51 Feline Babies
- 52 特別企画『対談』
B'Fles×おむ☆フェス
- 58 おむ☆フェス7
アフターレポート
- 59 あとがき
・プチオンリーのれん
- 64 編集後記・おくづけ

おむつつ娘Party!8

おむつつ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス8』開催記念合同誌

表紙 / 蜜姫モカ 裏表紙 / 雛良 のれん / 雛良 (敬称略)

カーワ
カワイイを
身に付けて
ミシンで
カクマル
カクマルの
フエリクスの
ー日が始まるの

南アメリカ
共和国軍
制式採用

Omniy

マイプ
ミッヅ

40枚入り

『てーぷ』のと
『ぱんつ』のと
どっちがいいか
おはなしちゅう



2022.9
liNON

(illust:瑞光ちのん)





おまたせ
しました〜

どうも
おしつこいで
きつてる...

お客さん
の前やし
笑顔で
あらんど...

カ
タ
カ
タ

ゆい
ゆい

ゆい
ゆい

カ
タ
カ
タ

たふふん
たふふん♡

バ
シ
テ
へ
ん
よ
ね
...
?

ゆいゆいゆい...

ふら
ふら

「さ～て、お次は未だにおむつが外せない雌犬よ♪」

「え？アタシもだって？アタシはいいの♪
だってカワイイもの♪」

「みんな、アタシの事好きでしょ？
ならいいじゃない♪」
ム

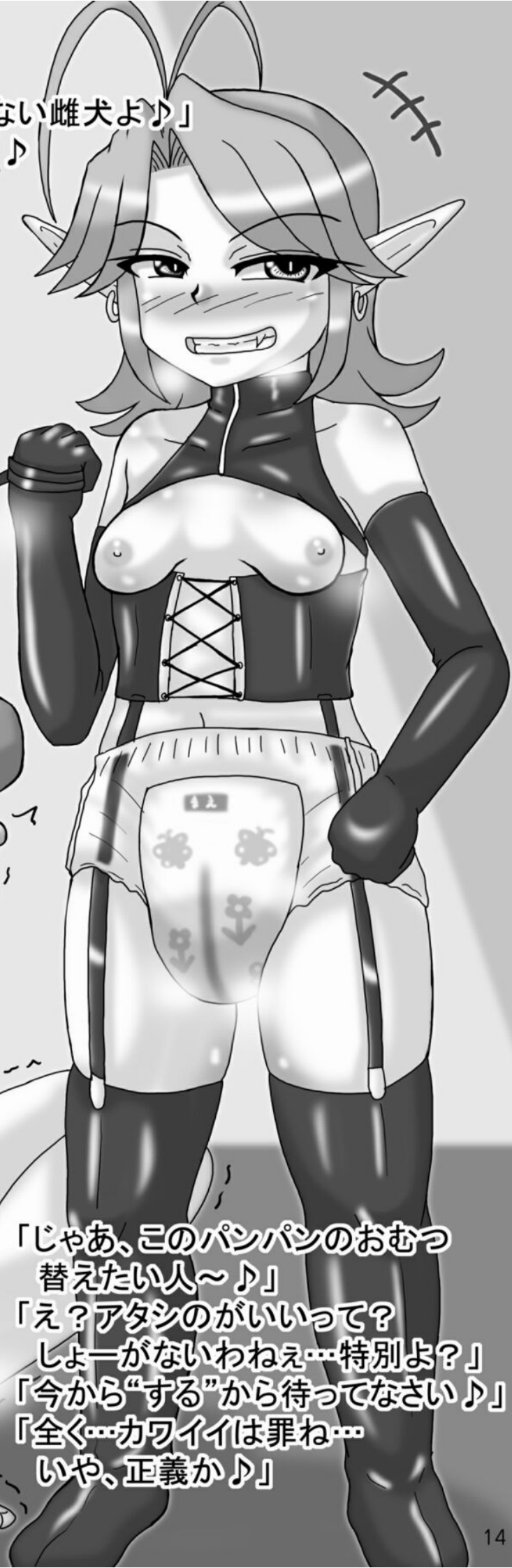


「じゃあ、このパンパンのおむつ
替えたい人～♪」

「え？アタシのがいいって？
しょーがないわねえ…特別よ？」

「今から“する”から待ってなさい♪」

「全く…カワイイは罪ね…
いや、正義か♪」



「先輩、自称Sでいつも私で遊ぶクセに意外といじめられるの好きなんじゃないですかあ？」
「や、ちが……これは、リサがゲームで勝ったから強制で……」

「言い訳〜？
先輩、S自称するクセにおむつにおもらしまでして言い訳ですか〜？
なっさけなくい♡」



苦痛のゆりかご 〜乳和園脱走未遂者に施される強制逆知育〜

何度も逃げ出そうとする悪い子は苦痛と快楽で頭の中をグチャグチャにして、まともに物事を考えられなくしてあげる。
これから1ヶ月間毎日、お昼寝の時間はこうやってお流腸とバイブのお仕置きをするからね。どんなに苦しくても1時間経つまでは絶対にアナルバルーンの空気は抜いてあげないわよ。苦痛に慣れないようにお流腸の量は少しずつ増やしていくからね。最後の1週間は毎回1リットル以上になるから、今とは比べ物にならないくらい苦しくなるわよ。

それと、お漏らしをする時以外はずっとアナルバルーンを入れてあげるわ。ご飯の時も、お風呂の時も、寝る時もずっとよ。アナルバルーンが抜けるのはお漏らしする時だけ。
1ヶ月経つ頃には思考力はほとんど無くなって1人じゃ何もできなくなるだろうし、お尻の穴はガバガバのユルユルになってウンチは垂れ流しになるけど、赤ちゃんになるんだから問題ないよね。それじゃお昼寝の時間が終わったらまた来るからね。バイバイ♡

おむつ注意報

たく@スパイラルクリーム

アダルト向けライブ
配信サービス
「Akumetv」

私はその
お天気コーナーで
キャスターを
担当しています

それでは
明日のお天気です

通常の番組との違いは
おしっこをすると
黄色から青に変色する
ラインのオムツを
履いている事だけ

午後から次第に
天気が崩れ……

あっ
そろそろ
漏れそう!



今度はお腹も痛くなってきた

ギョル

ゴッゴ

我慢していたから
いっばい出ちゃった!

お...大雨となる
おそ...れがあります

ビクッ

雷注意報

地域によっては
雷注意報も...

シタァ...

あっ!
出ちゃう!

あんっ!!

最近ではクセになって
自宅でもオムツを履くようになりました

ジキイ

もーっ

おむつ × VR

作…でんねこ

なっていた。

「パブリックになつたので入ったんですけど、おむつ趣味ですか？」

「え、ええ……はい……すみません」

パブリック、つまり全員が入れるような設定になつたようで、なおさら縮こまる。

言うなれば公開露出をしていたようなものだ。恥ずかしくないわけがない。

「そんなに縮こまらなくても。なんだか楽しそうでしたし……良ければ詳しく話を聞かせてもらえればうれしいなつて」

私は少し悩んだ。もしかしたら、彼女を自分の趣味に引き込めるのではという、邪な考えもあった。

が、それ以上に何故詳しく話を聞きたいのかと思うところもあった。

「わかりました。でもワールドの設定はプライベートにさせてください」

しばらくして、公園のプライベートワールドに移つた私と狐少女。

彼女は『キッカ』というネームであちこちのワールドを探索しているとのこと、私の秘め事にも偶然立ち会ってしまったわけだ。

「いなさんはおむつが趣味みたいですけど、いつからですか？」

いなさん——私のネームである『ここにはいない』からつけたのだろう。軽い口調で投げる会話のボー

ルを受け止め、投げ返す。

「小学校の頃、おもしろしをしちゃって、その時保健室でおむつをつけて帰ったのが始まり……です」

なるほどと相槌を打ち、しばらく静寂が続く。無理もない。相手はおむつ趣味があるかもわからない相手だ。何を話せば良いのやら。

「めくつてもいいですか、いなさんのスカート」

「えっ!? は、はい、よければ……」
突然の発言に動揺するも、私はプライベートなら大丈夫だろうとOKを出し、座っていたベンチから立ち上がる。

キッカさんも立ち、おもむろに私のスカートをめくつた。アバターの身長差は私のほうがそこそこ高く、まるで子供にスカートをめくられているような感覚すら覚える。

「どんな気分ですか？」
「恥ずかしいというか、ドキドキというか……」

「変態さんですね」
そう言われると言葉もない。実際に興奮してるのだから。

「写真も撮っちゃお。あ、勝手にばらまきませんよ。言う事聞いたらですけど」

そう言いカメラを虚空から取り出すキッカさん。私は突然のまくし立てに混乱し、あたふたする。

「パブリックであんなことする人ですから。それに……ホントは実際の場で見られたいのでは？」
「パブリックは設定ミスです。でも……」

おむつ × VR

作…でんねこ

私はおむつが好きだ。履くだけで子供っぽく振る舞っても許されるような、そんな気がするから。

でも、家で履けても外では履けない。外にもこのおむつを付けて出かけようものなら周囲の目が気になつてしょうがないし、何よりなんて言われるかわからない。

そんな思いからもやもやしていた私だったが、最近VRというものにハマりだした。仮想現実、現実に似て非なる世界は、基本1人だ。

仮想空間『V-Real』ここでは様々な仮想肉体——アバターが日々色んな人と交流している。

この片隅で私は1人、おむつを履いたアバターを使って写真を撮って楽しんでた。

そんなある日、私は個室のワールドで1人ミラーと向かいつつ写真を撮っていた。

ランドセルを背負い、下はスカートだがおむつを履いていて、それをめくり写真撮影を楽しんでいた。

「あの、こんばんは」
「は、はい!？」

急に声をかけられ、裏返った声で返す。そこには狐耳の生えた少女のアバターが立っていた。

私は「なんで人がここに？」という疑問よりも、どう対応すれば良いか解らず、私はただパニックに

「でも？」

「外は誰が見るかわからないし、なんて言われるかも……」

「それがいいんじゃないんです？」

キョトンとした口調で返すキッカさんに沈黙する私。

「で、でも……」

「怖いか恥ずかしいとか臆病さんですね」

いつの間にか立場の差が広がり、マウントを取られていく。

「ここから逃げることもできるが……」

パシヤッ

「えっ」

シャッター音が響く。キッカさんのカメラから鳴ったもので、私の格好は……スカートがめくれたままだ。

「これで逃げられませんね。もう何枚か撮っておこうっと」

「や、やめてください」

私の言葉にカメラをしまうキッカさんだが、すでに何枚かはもうパソコンの中だ。

「まあでも、この空間で慣れて現実で実際になんてのもありだと思えますよ。それとも、自分から変わるの怖いか？」

私はその問いにしばし考えた後「はい」と答えた。実際に自分から変わるの怖いし、周りが変わってくれればと思うフシがあったからだ。

「ならこうしましょう。私が都度都度メッセージを送りますから、それに従うこと。できなかつたらおしおきで」

おしおきと聞き、震える私。何をしてくるかわからないキッカさんの態度に、怖さと、興奮を覚えたのだろうか。

「まずは今からメッセージで送るソフトを入れること。しなかつたら写真をアップしますからね？ いいますか？」

そう伝えられ、メッセージで送られたものは外部ソフトだった。中身は、アバターの行動を制御するソフト。フェチズムを満たす目的で使う人もいるシロモノだが、私は相手もいなかったため入れてなかった。

「入れるか入れないかはおまかせしますね。せっかくだから楽しませよう？ それじゃあまた」

最後にキッカさんは私にフレンド申請を送り、ワールドからログアウトした。私もそれに続いてログアウトした。あまりに疲れた。

「ちょっと失礼で、しかしグイグイと引っ張るその性格は、私の中で確かに刺さっていた。」

「……うん」
私はなにかに取り憑かれたようにキッカさんのフレンド申請を承諾し、自らを縛る鎖をインストールした。

彼女の意のままにされるのを望むかのように動かしていく手。おむつをつけてた下半身は、いつの間

にか水分を吸って少し重くなっていた。

そんな出来事があった数日経ったある日、VReal用のメールボックスにメッセージが届いた。差出人は、キッカさんだ。準備ができたら22時にログインしてくれというシンプルなものだ。

しかし、これに込められた意味を私は知っている。もし行かなければ何をされるか。いや、あるいは行けばどうなるか……そんな複雑な思いを交錯させながら、私は待ち合わせ場所のワールドにログインした。

「来てくれると思った」
場所はこの前の公園、キッカさんは先に待っていた。

「それじゃ早速インストールしたか試させてね」
そう言いながら何かを操作するキッカさん。すると、私のアバターは自分の意志とは異なる動きを始めた。

「うん、ちゃんと入れてるみたいだね。そしたら

……このポーズを取ってみて」
キッカさんがミラーを展開させた後、私にとらせたいポーズを見せる。それはスカートをたくし上げ、おむつを見せるポーズだ。

「実際にやるんですよ。今から操作を切るのよ」

キッカさんが私の操作を切り、主導権を取り戻すと、先程と同じポーズをするように急かす。

「やらないとアップしちゃうよ。それともそつちのほうに興味する？」

私は焦りつつも同じポーズを取り、おむつをキッカさんに見せる。緑色のラインにライオンの絵がついた可愛らしいおむつがあらわになると、キッカさんにパシャパシャと数枚写真を撮られた。

「あつ、あ……」

「イエーイ、なんてね。次のポーズはと」

ピースをし、おむつの見えている私と一緒に撮るキッカさんは、次のポーズは何にしようかと操作し始める。

「あつ、またポーズが」

「あとはこれも変えちゃえ」

さらに変更を加えるキッカさん。しばらくすると再び目の前にミラーを出された。そこに映っていたのは、幼稚園服を着て、四つん這いになっている自分のアバターだった。

「こつちのほうがお似合いよね。あとは向きを変えて……」

向きも後ろ向きに変えられ、おむつが丸出しになる。見ようと思えば自分も見られる角度にされ、キッカさんは私の背に乗った。

「本当ならおむつしてるお尻をペンペンしたかったけど、感触まではないからね。現実でならできのるに」

キッカさんは残念そうに言い、私の背中から降りた。

「それじゃあ試したことだし、あとは時間つぶしに遊んでみようか。でもその前に一つ……今度から私のことをキッカお姉ちゃんって言うこと」

「お姉ちゃん？」

私はドキドキしながらも、不思議そうに聴き直す。「だつておむつが外せない子の面倒を見ているのだからお姉ちゃん、でしょ？」

「……」

恥ずかしさと屈辱感が交じるが、それ以上に興奮が湧いてくる。子供っぽく振る舞いたい。そんな気持ちが勝っていく。

「わかりました、キッカお姉ちゃん」

「カチコチせず言つてほしいな。子供っぽく」

「うん、わかったキッカお姉ちゃん」

言われるがまま、私はキッカお姉ちゃんと呼び、お姉ちゃんと一緒に滑り台や砂場で遊んだり、追いかけて遊んだ。子供の時のような気分で楽しい半面、格好が格好だったので恥ずかしさもあつた。でも、それでも引つ掛かりが自分の中にはあつた。

「さて、そろそろ落ちるね」

「うん、遊んでくれてありがとう」

「でも、ここじゃ物足りないかも」

「ん？」

私はキッカお姉ちゃんの言葉に首を傾げつつ、なにか刺さる感触があつた。

「仮想空間じゃ、やっぱり限界があるかなつて。なんてねそれじゃあまた遊ぼうね」

キッカお姉ちゃんはそう言うのとログアウトし、自分だけが残された。

1人になった後、キッカお姉ちゃんが言った言葉を思い出す。『仮想空間じゃ限界がある』という言葉は、確かにキッカお姉ちゃんと遊んで思った言葉だった。

自分もログアウトすると、生身の体に戻るような気がする。楽しい時間が終わる気がする——にももかわらず、付けていたおむつは何度かおもらししたせいでやや重くなつていた。

「……うん、外に出てみよう」

私はヘッドセットを外し、ズボンを履く。若干ゆとりがあるとはいえ、おむつを履いてるとお尻が大きく見えて恥ずかしい。これを人に見られようものなら……。

「だいじょうぶ、だよ、キッカお姉ちゃん」

私は自分に言い聞かせるように、おむつをしたまま真夜中の街に繰り出す。

仮想現実というほんの些細なきっかけで、現実をも変えられる。

私はおむつが好きだ。でも、仮想現実も好きだ。

もつときたなくしたら君は

ラッセル・ヘッド

私は暖かい海を揺蕩っていた。南の海に身を委ね、暖かい日差しを浴びながら、ゆらゆらと波に揺られていた。ここには陰口を言うクラスメイトも、追いかけてくる警察も、評判を気にしなければならぬ面倒な世の中もない。ひなと二人だけの世界で、ただこうやて永遠に過ごせばいい。手を伸ばせばそこにひながいる。他に何もなくていい。

「ねえひな…」

さつきまで一緒に浮き輪で漂っていたひなの存在を確かめようと手を伸ばすと、そこには誰もいなかった。砂浜に上がったのだろうかと頭を上げてみても、白い砂浜に人影はなかった。

「ひな…?」

浮き輪を抜け出して、遠浅の砂浜をざぶざぶと岸の方へ歩きながら、私はあたりを見渡した。

「ひな?...ひなあつ?」

ひながいない。もう私にはひなしかいないのに。

「ひなっ!ひなあああつ!!」

「あーいちゃん」

不意に、どこからともなく私を呼ぶ声が聞こえた。もう一度砂浜を見渡すと、眩しい光の向こうに人影が見えた。

「ひな?」

逆光で分からないけど、きつとひなに違いない。私は人影の方へ走った。だが懸命に足を動かすのに、その距離は少しも縮まらなかった。

「あーいーちゃん」

逆光の向こう、ふわふわの髪の毛が揺れている。私は砂に足を取られながらも懸命に走った。息が苦しい。胸が締め付けられて喉が焼けつく。もうすべての苦しみから解放されたはずなのに。

「あいちゃん、こっちだよ」

待って、ひな!もう意地悪しないで!私を置いていかないで!そう叫びたかったけど、焼けつく喉はただ壊れた笛のような細かい音を奏でただけだった。

「ひがあつ!!」

何とか絞りだした声は、自分のものとは思えないほど獣じみた、濁った声だった。

その声の世界を壊した。さつきまで広がっていた常夏の砂浜は消え、LEDの眩しい光の中と無機質な電子音、そしてざわざわとした声が溢れていた。体中に痛みが走り、手足は鉛のように重く、そのままどこかへ沈んでいくようにさえ感じられた。

「瀬崎さん!瀬崎さん!聞こえますか!」

耳元で男の人の大きな声がした。どう考えてもひなの声じゃない。私たちだけの世界に、私とひな以外は不要なのに。なんでこんな声が聞こえるんだろう。

「瀬崎さん!瀬崎さん!」

うるさい。鳴りやまない電子音とひなじやない誰かの呼び声。いらなものだらけの世界。私はそこへ引きずり戻されてしまった。

私は永遠になりそこねてしまった。

私が意識を取り戻した後、低酸素脳症と凍傷による入院と、警察から

の事情聴取で瞬く間に数カ月が経過した。私とひなは真冬の公園で倒れているところを発見されたらしい。様々な人が来て、家を出た日から病院に運び込まれるまでのことを、特に私の首に絞められた痕が残っていたことをしつこく訊かれたが、私は何もしゃべらなかつた。私の知りたことは一つだけだつた。

「ひなはどこ?」

私はまず何よりもそのことを知りたかつた。しかし私が訊かれたことに答えなかつたように、その質問には誰も答えてくれなかつた。

あの日、ベッドの上で、泣きながら、喜びながら、苦しみながら、私を愛しながら、憎しみながら、ありとあらゆる感情をすべて私に向けながら、私の首を絞め続けたひな。私は朦朧とする意識の中で、私だけがひなを独占できた喜びに浸っていた。瞼に焼き付いたひなの表情を思い出すだけで、私の子宮は疼いた。その疼きを抑えきれず、何度も秘所に指を這わせた。疲れ果てて意識を失うまで。

「あいちゃん、あいちゃん」

私を呼ぶ声に目を開けると、そこにはひなの顔があつた。

「ひな!」

私の声にひなが目を丸くし、教室中の視線が私に向けられた。一叶たちが「なにごと?」という感じで私を見ている。学校…そんなはずがない。もうここに私たちの居場所はない。

「なん…で…?」

「あいちゃん寝不足?午前中の授業、ずっと寝てたもんね」

初夏の気持ちのいい風が吹き込んでくるお昼休みの教室は、もう普段のざわめきを取り戻していた。何も変わらない教室。そんなはずはない

と思ひながらも、懐かしい日常の風景に安堵している自分がいた。今までのことは夢だつたのだろうか。それでもいい。何より、目の前にひながいる。

「ひな…ひな…ひな…」

私はうわごとのようにそれだけを繰り返した。

「ど、どうしたの?何かあつた?」

驚いて目を丸くするひなのほほに触れてみた。柔らかい。暖かい。

「え?え?あいちゃん、あの…人前だから…」

ほほを撫でられ、恥ずかしげにうつむくひながそこにいた。その顔を見た途端、私のほほを涙が伝つた。

「ひな…よかつた…」

「ふふつ、今日のあいちゃんは甘えんぼさんでしゅね」

まるで二人きりで部屋にいるときのようなひなの話し方に、急に変わったことに違和感を感じて顔を上げると、ひなは慈母のような微笑みを浮かべて、人差し指で私の涙を拭つた。そしてそのままその指を私の唇に押し付けたかと思うと屈み込んで、机の下から私のスカートの中に手を差し入れてきた。

「ちよつ、ひな、ここ学校…つ」

私は慌てて辺りを見回したが、ひなの行動に気づいた人物は誰も居ないようだつた。心拍数が一気に跳ね上がり、顔が熱くなった。

「あいちゃん動いちゃメツ!あいちゃんはおもらしちゃう赤ちゃんでしょ?だから、おむつ穿いてるんだよね」

そういわれて気づく。おしりがもこもことして、厚ぼったいものを股に挟んでいる独特の感覚に。ひなの指はスカートの最奥、私のおむつの中に入り込んできた。なんで…私…学校におむつで…?

「やっぱり濡れてるね」

ひなが嬉しそうに目を細めて、耳元でささやいた。

「みんなに言っちゃおうかな」今あいちちゃんが教室で何穿いてるか。それで、今どうなってるかも」

慌てて脚を閉じようとしても、たつぷりと水分を含んだ紙おむつはそれを許してくれなかった。

「いや…許して…言わないで…」

「許すも何も、あいちちゃん、みんなに恥ずかしい姿見られるの、好きだよね。みんなの前でおしっこするの、大好きだよね」

優しい笑顔でひなが恐ろしいことを言った。こんなことを知られたら、クラスメートからどんな目で見られるか。ひなとのことで散々突きつけられた、あの悪意のこもった視線に、私はもう耐えることはできない。しかも、みんながいる学校でこんなことをバラされたら隠すこともごまかすこともできない。

「そんなことない」

反射的にトーンが上がりそうになった声を押し殺して、私はひなを睨み付けた。

「でももう、バレちゃってるんだよ？ほら」

さつきまで自分たちの席でお喋りしていたはずの一片や碧唯が、いつの間にか目の前に立っていた。それぞれが突き出したスマホには、ひなが私の家で撮った赤ちゃんプレイの写真の数々が映し出されていた。

「そ…んな…」

「それに、そろそろまた出ちゃうでしょ？」

その一言がきっかけで、私は急に耐え難い尿意に襲われた。今の今まで何ともなかったのに。もうほんの一瞬でも気を抜けば、針で水風船を

突いたように決壊するだろう。私は目の前に友人たちがいることも忘れて、おむつの上から股を押さえた。

「出る…出ちゃう…やだ…」

「一片ちゃんたちだけじゃなくて、クラスの全員に知ってもらおうよ。ホントのあいちちゃんのこと」

「や…だあ…」

あまりの苦しさに涙が浮かんできた。今すぐここから逃げ出したいのに、もう我慢の限界で立つことすらできない。チリチリと膀胱が痛み、こらえきれない尿が、じわりじわりと熱く冷えたおむつを温めていった。溢れ出る間隔が徐々に短くなり、それとともに暖かい範囲がおしりの方へと拡がっていく。おむつの吸収力の限界を超えたのか、熱い雫が幾筋もふくらはぎを伝っていく、椅子の下からピチャピチャという水音も聞こえ始めた。もう我慢していても、していなくても、溢れ出るおしっこの勢いは大して変わらなくなってきた。

「やだ…やだあ……」

涙が溢れて、私の顔は鼻水とよだれと涙でみっともなく汚れていることだろう。もう終わりだ。これから私は、高校生にもなって教室でおしっこを漏らすんだ。しかも、このあと、みんなにおむつ姿もさらされることになるだろう。私の痴態に気づいたクラスメートが私を指さして嗤い、或いは嫌悪の表情を浮かべていた。

「え、あれ、瀬崎さんマジ……？」

「やっぱあの写真ホントだったんだ」

「ありえなくない？」

「高校生でおもらしとか…キッショ」

「写メ写メ(笑)」

「汚いから近づかないでほしいよね」

波紋のように憐れみと好奇心と嘲笑と悪意に満ちたざわめきが拡がり、教室中の視線が私に突き刺さった。

「あいちゃん」

いつの間にか背後にまわっていたひなが、壊れ物でも抱くかのように優しく私を抱きしめた。

「大丈夫。あいちゃんには私がいるよ？どんなことになっても、どんな姿でも、私はあいちゃんが大好きだよ」

「ひな…」

「ほら、大丈夫。しー、しー、しー…」

耳元でささやかれたひなの声が脳が蕩けさせて、全身の力が抜けていった。あふれだす勢いそのままに、私の尿道を熱いものが駆け抜け、身体の中が空っぽになっていく快感に私は身をゆだねた。

「あー…あー、あ、あ、ああー…」

「ふふっ、あいちゃんはいいい子でしゅね。ほら、とつてもいいお顔でしゅよ」

ひなが携帯で撮って見せてくれた私の顔は、絶望と苦しみと快楽が入り混じった表情だった。それはあの夜、私の首を絞め続けたひなの表情を思い出させて、私は震えた。一叶たちも、他のクラスメートの姿も消えて、もはや止めることができない水流が床を叩いて奏でる水音と、ひなの排尿を促す声だけが世界のすべてだった。

私の幸せな夢を破ったのは誰かの金切声だった。この閉鎖病棟では毎日のことだ。ひなの幸せな時間、それはやはり儂い夢だった。

意識が浮かび上がってくるとともに、最近すっかり慣れてきた下半身

にまとわりつくような湿り気に気づいた。

『あは、今日も出てる…』

両手を覆うミトンはベッドの柵に紐でつながれているので、手で触れて確認することはできない。しかし寝る前にあてられたおむつの乾いた肌ざわりとは全く違う、じつとりと湿った感覚とずっしりとした重みは、手で触らなくても愛吏の年齢であれば本来しないような粗相を昨夜もしたことを伝えていた。

『んっ…』

ゆつくりと力を抜くと、わずかに膀胱に残っていた尿がゆるゆると流れ出し、おむつの中に熱い湿り気が拡がった。

「ふああ…」

身体の中身が空になるような快感に、愛吏の口からは溜息とよだれがこぼれ、眠っている間に流れ出た唾液とあわさって、愛吏の枕元はべつとりと濡れそぼっていた。

たつぷりと水分を含んだおむつはパンパンに膨らみ、脚を閉じてまっすぐ伸ばすことができなくなるほどになっていた。あの頃、ひなこに穿かせたときも、反対にひなこが私に穿かせたときも、おむつを実際に「使った」ことはなかったもので、漏らすとこうなるというのを知ったのは、ここに入院させられてからのことだった。

病院で一命を取り留めた後、最初はカテーテルを入れられていたが、一般病棟に移って管を抜かれたころから、私は時々トイレを失敗するようになってしまった。気づいたときはもう我慢の限界で、ただベッドを濡らすことしかできなかった。医師からは低酸素脳症の後遺症ではないかと言われた。

「瀬崎さん、またですか？」

最初は笑顔で対応してくれていた看護師も、失敗を繰り返すうちに、次第に私に向ける視線が厳しく、嘲笑と侮蔑が混じったものに変わっていった。でも、失敗するたびに誰かが来てくれる。もしかすると、それがいつかひなになるかも知れない。そんな何の根拠もない思い込みが、いつしか私の心に芽生えた。あまりの失禁の多さにおむつをあてられることになった時、うれし泣きをして気持ち悪がられた。私からしてみれば、ひなが私のもとに来てくれる日がまた近づいた気がして、そしてひなにおむつを穿かされた日のことを思い出して、心の底からうれしかっただけなのに。そこからはトイレの失敗を繰り返して、来る日も来る日ももつと惨めな姿になることだけを考えるようになった。

分厚いおむつに無理矢理押し広げられた股関節では、おしりもまた擦げられてしまう。お腹に力を入れなくても、ふすふすとガスが漏れ始め、続いてほとんど抵抗もなく柔らかい便がおむつと尻肉の間を満たしていった。常におむつに排泄し、トイレを使わない生活に慣れた私の括約筋は、もはやその機能を失いつつあった。

「ひつ……うあつ……」

身体から押し出された汚泥は狭い空間を押し広げ、前の方にも侵食してきた。私はベトベトした排泄物が尻肉を撫でまわす感触をさらに味わうかのように、おむつに押し広げられた股関節を無理矢理閉じて開いてを繰り返した。ねっとりとした汚物がおむつの中でこねられ、さらに広がり、新たにできた間隙は次々に漏れ出てくる便で満たされていった。

私は自由に動く脚だけではなく、拘束された腰もベッドにこすりつけるように動かし始めた。水分をたっぷり含んだおむつに柔らかかな便が拡がり、にちゃにちゃという汚い音がおむつから聞こえ始め、先ほどまでとは比べ物にならないほどの悪臭が部屋を満たし始めた。いくらおむつ

をしているとはいえ、排泄物の臭いを完全に閉じ込めておけるわけではない。むしろ、最近のおむつはかぶれを防ぐために通気性をよくしているのだから、汚れたおむつの臭いは漏れやすい。私は自らが生み出した臭いに顔をしかめながら、そんな汚物にまみれた惨めな自分に酔いしれていた。

「瀬崎さん、おはようございま……うわ、もう、この子また！」

ガチャガチャとカギを外す音がしたかと思うと、数人の看護師が銀色のカートを押して、病室に入ってきた。そんなことを気にするそぶりも見せず、私はひたすら腰を振り続けた。看護師たちは私を無理矢理押さえつけて、おむつを替え始めた。

「触らないで！私、このままのきたないままがいいの！」

そんな私の叫び声を無視して、看護師たちは悪臭に顔をゆがませながら、愛吏の一晚の汚物を機械的に処理していった。

「ひな、ひなあ！早く、私のおむつ替えに来て！」

おむつを替え終わった看護師たちが出ていき、ゆっくりと閉じていく扉に向かって愛吏が叫んだ。

「きたない私を、早く、迎えに来て！ひなあつ！」

重々しい音とともに扉が閉まった。オートロックが愛吏を外界から切り離れた。

どこかで私を呼ぶ声がある。行かないきゃ。待ってるから。今度こそ、一緒に行くんだ。どこまでも。澱んだ深い海の底から引き上げられるように、私の意識が浮かび上がってきた。

「あ……い……ちゃん……ど……こ……」

(完)

おむつにおしっこをして えっちな気持ちでちゃう 少女のお話。

著 小林ゆうり

私もおむつを穿きたい。
そう思ったのは今年の冬のこと。

私には一回り離れた妹がいる。
まだ幼稚園に通っている、小さな小さな妹だ。
とてもかわいい。なんといつてもかわいい。私
とよく似た黒髪のボブカット。お姉ちゃんとい
緒の髪型がいいとかわいいことを言っていた。
お姉ちゃんになりたいと。

だけど私になったら、ちよつと地味だし、小
柄で胸もないし、キラキラした路線からはちよ
つと外れている普通の子になってしまふ。妹は
かわいいからキラキラしてほしいけど。
そんな妹も気がつくとおむつを卒業したみた
いで、私にパンツを自慢してきたことが微笑ま
しい。

緊急時に使えるかもしれないから、とおむつ
はとりあえず置いておくことにしたのだが、置
き場がないという都合上、私の部屋の押し入れ
に置いておくことにした。

別に、ここまでならたいしたことではなく、
押し入れに妹が使っていたおむつがある。とい
うことだけで終わっただろう。

しかし私も人並みの性欲を持っていて、自分
を慰めようとしていた、ある夜のこと。

むらむらとした気分が沸き立ち、『ああ、今日
は寝る前にやろうか』と、学校で出た課題をし
ているとき、ぶるりと身体が震えた。

その正体は尿意。そういえば晩ご飯のとき、
妙に喉が渴いて、お茶を多めに飲んでいたこと
を思い出す。

元々怠惰気味な性格だった私はトイレに行く
というわずか数分で終わるようなことでもやた
らと面倒に感じた。

しかし尿意を認識すると結構溜まっているこ
とがわかった。

(おむつ……)

どうしてだか、私の脳裏に浮かんだ三文字の
言葉。

(いや、それはまずいでしょ)

いくら私でもそこまで横着するのはまずい、
と思いつつも、胸の変な高鳴りを感じてしま
った。

それは、むらむらとしているときに感じる、
ああ今日はこれでオナニーをしよう、と思つて
いるときと似たような感覚。

おむつに対してドキドキとしている自分がい
ることを自覚することは早かった。

そういえば妹がもっと小さいときにおむつを
替えられている姿を何度かうらやましいと、思
ったことがあった。

きっと潜在的に甘えたいなんて思ってしまった
のだから。

(なら穿いてみる……?)

そう思うともう、私はすぐに行動に移してい
た。

面倒くさいことはとにかく避けたい私なのに、
これほど早く動いたのは、とにかくおしっこが
早くしたいということもあった。

押し入れからおむつを一枚抜き取って自分の
下腹部に当ててみると、まあもちろん私には穿
けそうになかった。結構小柄な私でもさすがに
けど、こうすれば。

おむつの横を破いて広げると、穿くことは無
理でも、おしっこは出来そうだった。

そのままパンツと部屋着のズボンを脱ぎ捨て、
割れ目に押し当てるようにしておしっこをしよ
うとしたが、なかなか出てくれない。

自室でおしっこをしようとするなんて異質な
ことを脳が『いや、それは』と苦笑いをしてい
るみたいで。

「あつあつ……出るう……つ」

なんとかおしっこはできたが、全部を吸いき
れず、脚と床をおしっこで汚してしまった。

だがこれが私の性の欲求をより膨らませてし
まった。

なんだか悪いことをしたような気分になった
私はそのまま派手にオナニーをして、ストレス
を発散させた。

だけど、おむつにおしっこが出来なかった失
敗だけは頭にこびりついていて、あれは気の迷
いだと忘れようとしても忘れることができない
くらい、欲求として私の中に溜まっていった。

穿いておしっこをしたなら、全部吸いきつてく
れたらと。

そして、それから一週間くらいが経ったある
日。

バイトのお金が入った私の懐は余裕が出来た。
欲しかった本を買おう、かわいい靴を買おう、
あれも買おう、これも買おうと思っていた優先
順位を『おむつを買おう』という思いが一気に
壊してしまった。

ドラッグストアにて。

帰りはおむつを穿いて、おしっこをして……と考えていた私は、ふんわりとしたスカートを着いた。これならお尻が目立つことはないだろうと考えた。

それにおむつの袋を入れるために大きなカバンを持って、わざわざ自転車で隣の市までやってきた。ここなら知り合いは絶対にいないし、二度とくることはないだろうから。

しかし、いざおむつを買おうとなると、やっぱり躊躇してしまう。

(これは……)

大人のおもちゃをネットで買うのとはまた違ったドキドキだった。

別に悪いことでもないのに、妙な背徳感がある。なんだか新しい世界に足を踏み入れたような。

すでもうパンツが濡れてしまっているような気がするくらい、こっそりと興奮している。

たかさんのおむつが並んでいるコーナーで足が止まる。そこでうろろう、うろろうと何度も何度も行ったり来たり。

「何かお探しですか？」

知らず知らずのうちにかなり挙動不審だったのだから、自分の母親よりちょっと上くらいのおばさん店員が私に声をかけてきた。

「あ、あの……えっと……その……」

いきなりのことだったから、私はしどろもどろになってしまった。

「うーん……？ ああ、そういう」

おむつがたかさん並んでいるところで、年頃の女の子がきよるきよるとしていたら、『なんとなく察したよ』という表情をされてもおかしく

ないだろう。

(そーいうワケじゃないんだけどなあ……)

妙な恥ずかしさが出てくる。だけど、本当に必要な子がこういう目にあつたらもつと恥ずかしくて爆発していたのか、それとも慣れっこの感じになつていたのだろうか。

「そうね、夜かしら？ 昼かしら？」

どっちだろう。オナニー用に欲しい、だなんて、言えるワケがないだろう。

「昼……で」

と適当なことを言った。昼も夜も必要ではなく、ただ自分の中の性欲を発散させたいだけだと言うのに。

「それなら……これならあなたにも穿けそうね。おばちゃんがレジまで持っていくてあげるから、ちやちやつと買っていくといいわ」

ムダに行動的で協力的なおばさん店員のおかげで、私はあまり恥ずかしい思いをすることなくおむつを買うことができた。

ほんのりピンクのパッケージ。かわいいけど小さな女の子が写っていて、スーパービッグと書かれている。いやこれは子供用じゃないのか、と思いつく。いや、あそこまで自信満々なおばさん店員を見ると、何も言えない自分がいた。

そしてレジで。

「はい、おつりね。いやあおばちゃんのところもね、あなたくらいの娘がいてね、あの子もよくおねしょしちゃうからね、だからね、わかるのよね。うんうん」

とおばさん店員は本当かウソかわからないことを言い出した。

(私くらいでも、かあ)

私はそうではないからか、妙な罪悪感。本当に必要な人になんとか悪いことをしているみたい

いだ。

それは一瞬の気の迷いに近いモノだった。

おむつを買った私は、そのままドラッグストアのトイレに入って、すぐにおむつを穿こうと思っている。

(うわあ……やっぱ)

じつとのおしっこではないアレで綿のパンツは濡れてしまっていた。

ただおむつを買っただけに、こんなにも。だけど、今日の目的はそれもあるけどそれだけじゃない。

(おむつ穿いて……ね)

汚れたパンツを脱ぎきって、カバンの中に雑に押し込んだ。おむつも一枚取り出して残りは全部しまう。なんとか入ったけど、思ったよりおむつはかさばるみたい。

(本当に穿けるのかな、これ……)

かさばりはするけど、割と小さい。そしてかさかさとする。かわいい柄も入っていて、赤ちゃんのたためのおむつ、という感じはそこまでしなかった。

足を通してみると、多少はひっかかりながらも普通に穿けてしまった。自分も小柄な方だけど、少し驚いた。

(穿けるじゃん、これ……)

それに、意外とすつきりとしている。もつともこもかさかさする感じだと思っていたのに。

(……なんだか不思議な感じ)

初めておむつを穿いた私。もう高校生なのにおむつを穿いた私。おむつが必要な子じゃないのに、おむつを穿いたアンバランスな姿になった私。

「くっく」

思わず声を出さずに悶えた。自分は何をやっているのかと。

(興奮してきちゃった……)

すぐにでもオナニーを始めたい欲求が大きくなる。だけど、今日の目的はそれだけではない。やない。

スカートを通して、お尻をさわさわ。

(全然わからない……)

紙っぽい音もそんなにないし、穿き心地だつてなんだか包み込まれているようで、安心感があるような気がしてくる。ふわふわで、心地良さすらある。

(おしっこしても本当に大丈夫かな?)

じっくりと溜め込んだおしっこはこの前ほどではないけど結構な量が出そうだ。また吸いきれず溢れちゃうのでは、と考えてしまう。

ここは家じゃないし、あまり汚すことは避けたい。自分もトイレも。

(家までガマン、しようかな……)

おもらし……をしようかと思はなさそうだが、自転車に乗ってまた結構な距離を走るとなれば、少しきついかもしれない。おしっこというより体力的な。

(どうしようかなあ……)

そんなことを考えていたら、とんとんとトイレのドアがノックされた。

「まだですかあ」

幼い女の子の声。そうか、一つしかない個室を結構な時間独占していたことになるのか。

「ごめんなさい、と汚れていないトイレを流して、ドアを開けると小学生くらいの子がおしっこが出るのをぎゅっと押えて泣きそうになっていた。……ああこれは悪いことをしてしまった。

それにしても、外に人がいたことに気がつかなかったなんて。おむつの音とか聞かれていなかっただろうか。

(……でもどこでおしっこ、してみようかな)

トイレから強制的に出てしまった。まだ心の準備もできていなかったのに。

「……っ！」

そう、私は今パンツを穿いていない。ふんわりしたスカートの下は、私が穿くにはふさわしくない紙おむつ。

——途端にドキドキが増してきた。

お尻は目立たない。普通にしていたら誰も私がおむつを穿いていることなんてわからない。

そのことが胸の音の速度を上げた。

(おむつ穿いて自転車乗ろうとして……っ)

そんなことがなんで興奮するのもわからない。だけど今はきつと風が吹いても、人とすれ違っても、何をしても、興奮の材料になつてしまっただろう。

『今、私はおむつを穿いているんだよ』

と。

そのまま自転車に乗って数分。

お尻に潰されるもこもこ部分がちよつと変な感じ。これでおしっこをしてもつともこもこにしてしまつていたら、一体どんな感じになつてしまうのかと興味が湧く。

膨らんだところが割れ目に当たる。それに加えて自転車の振動。もしかしたらパイプのようになつて気持ちいいのでは、と。

「公園……」

目に入ったのは、それなりに大きな公園。休日の午後だと、人が多い。特にファミリーや子どもが。

「……」

私は自転車を駐輪場に止めていた。

(見られたいけど見られたくない。おむつを穿いている自分を曝け出したいけど見られたくない。私だけの秘密に……)

がこん、自販機でペットボトルのお茶を買った。今は別に喉も渴いてないし、割とおしっこがしたいというのに。

「んっ……ぶう」

お茶を半ば無理矢理に半分飲んだ。それだけでお腹がちよつと苦しくなる。すぐにおしっこになるワケじゃないのに。

やっぱり公園にはたくさんの方がいた。

幼稚園児くらいの子とボール遊びをしているご家族。シートを広げておやつタイムをしている大学生くらいのカップル。サッカーをしている小学生軍団。休日のちよつと大きい公園はバラエティ豊富だ。

(おしっこ……結構したくなつてきたな)

お茶を飲みきった私はお腹がちやぶちやぶしていた。のんびりとしたペースで公園をちよつと歩いただけで疲れてしまった。

「……ふう」

ベンチに座ると、ちよつともこもこなお尻がやっぱり気になった。

(ちよつと……してみようかな。おしっこでできるかな。漏れないかな、大丈夫かな)

ゆっくり力を抜いてみる。けどおしっこは出そうになかった。

普段ならトイレに小走りで行っていくくらいにはしたくないのに。

やっぱり人前というか、トイレじゃないところでおしっこを出すことは無理なのかもしれない。

い。言われてみれば物心ついてからおもらしをしてしまったことも私にはない。

小学二年生の遠足のとき、クラスのおとなしい子が遠足のバスで漏らしそうになって、先生の持っていた携帯トイレを使った、というくらいしかなかったはず。そう、誰もおもらしなうてしていなかった。

もう私はほとんど大人。やろうと思ってもおもらしなんてできないのではないか。

「ごめんなさい」

そんなことを悶々、考えているとき、私の足下にボールが転がってきた。

「はい」

立ち上がって投げ返してあげた瞬間、

じよろっ。じゅいっ。

あまり使わない力が入ってしまったせいとか、おしっこが少し漏れた。

さっきまでの綿のパンツなら、小銭二つ分くらいのシミができて、ちよつと気持ち悪いやつ。(おしっこ今出ちゃった……っ)

事故のようなモノとはいえ、一度緩んだ栓はもう、簡単に開けられそうだった。

いくらガマンしていたとはいえ、普通ならないことだ。おしっこを少し漏らしてしまうなんて。

(……この感じ)

じゅわつと出たおしっこが一瞬でおむつに吸収された。そういうモノなのだが、何も染みていない、濡れた感触もない。ふんわりさらさら。

ふうつと身体の力が抜けて、変なスイッチが入ってしまいそう。

(このまましちやえるかも……っ)

ちよつと脚を開いて。ベンチの前で立っているのは変に見えるかもしれない。けどもうあ

まり考えることができなかった。

もうおしっこができるかもと思うと、頭もお股も緩みそう。

「ん、ふ」

(あつ……おしっこできそう……っ)

ふわつと身体が浮きそうになったと思ったら、じよろ、ぶし。

今度は自分の意思でおしっこが少しだったけどできた。ちよつとだけおもらしができた。

(あつあつ、このまま、このまま……)

しゅわしゅわと、コントロールされながらゆつくりとおしっこが音もなくおむつに当たっていく。

(えっあつやばいっ)

おしっこが止められなくなった。

なんとか一回止めて心の準備をしようにも、ちよろちよろ、しゅいしゅいと溢れるようにおしっこがおむつに当たっていく。

(おもらし……こんな感じなのかあ……)

ガマンできなくて漏らしてしまったのではないけど、思った以上に官能的だ。

温かくて、おむつがもこもこしてきて、重くなってきた、気持ちよくて。

このイケナイことをしている感が私を狂わせる。(これは……)

私の性癖の扉を間違いなく開けた。思いつきり、勢いよく。

「あ、あつ、ああつ……。ふう」

気持ちいい。気持ちいい。頭がおかしくなりそう。ただおしっこをしているだけなのに。おむつにするだけで、外でするだけで、なんでこれほど気持ちよさが変わるのか。

おしっこが漏れていないとわかると栓は一気

に緩み、おしっこもトイレと同じように、勢いよく噴き出した。

(身体がとろけちやいそう……)

おしっこがおむつにすぐに吸収される。それでも、漏れない漏らさない。

(もう……おしっこ終わつちやう……っ)

お股がじんじんと熱い。おしっこだけじゃないモノでじつとりと。

おしっこが終わってもまだずっと余韻が続いているみたい。

(これだけおしっこしても……漏れてない。おむつパンパンだけど、そこまで目立ってない……)

ぶもんぶもんなスライムがぶら下がっているみたいで、なんとも言えない感触だ。

(これ、めちやくちや興奮するかも……)

私の中で予想通り、いやそれ以上の反応だった。

やつぱりまだ私は子供だった。

このおしっこをしてぶつくりしたおむつの感覚を自分でも理解しきれていない。ただイケナイことをした。気持ちいいことをした。……ああ、このままオナニーをしたい。ということだけが頭にある。

(ぶよん、ぽよぽよ……)

おしっこの熱さも落ちてきて、じつとりとした感触からしつとりに変わっても、私は脚を肩幅に開きながら立ち尽くしていた。

まだこのおしっこをしちやつた、という事実を抱えていたかのように。

(おしっこしたんだ……おもらししちやつたのに、誰にもバレない……)

私のすぐ後ろを走っているサッカーの格好をした男の子にも、ボールを投げている小さな子

にも、私がおしっこをしたこともおむつを穿いていることもわからない。それは私だけの秘密だ。

そう思うと、ムラムラが強くなってきて、足がようやく動き出した。

(うわ、歩きにくい)

脚を閉じることができないし、大きな膨らみが揺れて、変な感じになってしまふ。

ああ、小さな子ががに股になるのがよくわかる。

ひよこひよここと、細かなステップでトイレへと向かう。おむつにおしっこをしたばかりで膀胱の中は空だというのに。

この公園のトイレは割と広い。そしてキレイだ。

入ったことはなかったけど、案外悪くない。

……ちよつと『そういうこと』をするには良い感じかもしれない。

個室に入って、すぐにスカートを脱いだ。

「……っ！」

おむつは思った以上にこもこもになっていた。

さわさわとお尻の膨らみが目立たないと思っただけ、これは歩いているともしかしたらバレる可能性もあったのでは、と思えるほどだ。

もしおむつがバレていたら。

「……ん」

ぞくり、身体の芯が震えた。こんな感覚は触らないとならないのに。

(したくなってきたあ……)

洋式のトイレに座って、ぶるんとおむつが揺れる。

「すんごいふにふに……」

触るとそう思わずつぶやいてしまうほど、おむつがばんばんになっている。あんなにすつきりとしていたはずなのに。

(それに……なんだか……)

妙にいやらしく感じる。

そう感じた次の瞬間にはもう、手はおむつに伸びていた。

「——あっ！」

むにむにの上から、きゅつと押さえつけるように触っただけで、身体がびくびくと、いつもより大きな刺激に震えた。

(あぶな……声出ちゃいそうだった……)

こんな公共の場で始めそうな時点でダメなことだけど、それはもう家までガマンできそうにない。

それならせめて、と声を抑えないといけないし、早くすつきりさせないとまた人を待たせてしまうかもしれない。

(でも気持ちよくて……)

ずっとむにむにふにふに、きゅつきゅつと割れ目におむつの膨らみをこすりつけていた。

これがじゅつじゅつと、じわじわと温められていくような感覚がクセになる。

ずっとこのまましていたいと思えるほど。

「ふわ……」

パンツの上からとまた違う。

パイプほど強くない。

ちよつどいい刺激が、私をうっとりとりとろとろにさせていく。

一気に噴火させたい気持ちもある。じわじわじゅつじゅつたりたい気持ちもある。

そんな私の目に映ったのは、手すりだった。

「……」

ぞくり、喉が鳴る。

(ここにこすりつけたら……)

絶対気持ちいいだろう。角にこすりつけるのは元々結構好きだけど、この膨らんだおむつとすりとなら、どれだけの刺激か、想像しただけで頭の中が吹き飛びそうになる。

「……」

もうそうなたら私は止まることができなかつた。

「……あ」

むにむに、とおむつが手すりにめりこみ、私の割れ目にもぎゅつと、膨らみが気持ちいいところにも当たる。

じわじわから一気にがばつと熱が上がる。

もつと、もつととこすりつける力が、速さが一気に増してしまふ。

「あつ……うん、んっ」

声を抑えよう抑えようとしても、それでも腰の動きに合わせるように、いやらしい声が漏れていつてしまふ。

(なにこれ……っ！)

未体験の快感。気持ちいいと思う前に身体がもう、こうすればああすればとぐいぐい、深みに落ちていく。ぐちゅぐちゅとおむつの中からいやらしい音が聞こえてくる。

子供っぽいおむつから、オトナな音。このアンバランスさもまた素敵だ。

「ん……っ！」

声を出したい。思いつきり気持ちいいのを表したい。ただでできないもどかしさ。しちやいやない背徳感。ああ、もうたまらない。

頭の中がおむつオナニーでイッちゃうことだけになって、ばぁんと弾けた。

「……っ！ あ……っ！」

手で口を押えて、思いつきり腰を振る。がた

がたと音が鳴ってしまっているけど、そこまで気にすることができない。

(気持ちいいっ！ おむつでオナニー気持ちいい……っ！)

そのままフィンツシュまで駆け抜けた。

(イク……っ！ イツちゃう……っ！)

「んっん！ んううううっ！」

視界がちかちかして、きらきらして、ふわふわして。

何度味わっても、快感の弾ける瞬間はたまたまない。生きていると本当に実感した。

「あっあっ……」

果てた私は力が抜けて、掃除はされているとはいえ、衛生的ではないであろう、トイレの床にへたり込んでしまった。

「あうう」

しよろしよろ。身体にちよつとずつ作られていたおしっこも、力の入らない私から流れ出る。まるで小川のせせらぎのように。

(またおしっこが……)

おむつはもうおしっこを吸いきれなくなっていた。太ももの隙間からおしっこがちろちろ漏れてきた。

(あっ漏れてきちゃったあ……)

その生温かなおしっこも気持ちいい。

「あー……」

そのまま涎が垂れて、太ももにぼとり。

「つめたっ」

その一滴が私を我に戻した。

(えっあっ！ やばい！)

そんなにたくさん漏らしたワケではない。ほんのり吸収しきれなかった分だけ。だけど下半身おむつだけの私の靴と靴下が少しおしっこに染まった。

「うわあー……」

立ち上がるとおむつの膨らみが歪になっていた。おしっこもたくさん漏らしたし、こすりつけるオナニーもしてしまったから。

「とりあえず脱いで……」

おむつを脱ごうとしたら、少し下げたところでぼてんと落ちた。穿いているときはそこまで思わなかったけど、おむつは相当重くなっていた。

(私、こんなにおしっこを……っ)

そう思うとまた胸がアツくなる。

もう一度したくなるのをぐっつと心の奥に押し込んで、濡れたお股辺りをキレイに拭いた。

今度はウェットティッシュも必要だ。これは。

(……)

キレイになって、さあ満足したしパンツを穿いて帰ろうと思っていたのに、急に思考が止まった。

(……)

私の目に映る大きなカバン。その中にはまだおむつがたくさん入っている。

(……)

パンツの替えだつて一応入れてきた。いつものちよつと子どももつぽいやつ。

(……穿きたい)

ふわふわで、さらさらな。

(……もう一度)

おしっこをしたときのずっと触っていたいのもこもこ感。

(おむつ……)

クセになりそうな感覚。

新しい私が生まれてしまった瞬間だった。

私は新しいおむつを穿いた。

あれだけずっしりもこもこだったのに、すつきりしている。

もう普通のパンツを穿きたくなくなるかもしれないほど。

家に帰ってまたおしっこでおむつを膨らませよう。おねしょとかもどんな感じなのだろうか。いっそ学校に穿いていたらどれだけドキドキするだろうか。

あれもこれもと想像する自分はもう、どの姿でもおむつを穿いていた。

悪役令嬢はトイレに行かない

ビード

煌びやかな装飾の施された大きな部屋、そしてそこを埋め尽くすように居並ぶ、美しい衣装をまとった気品溢れる人々。

そう。ここは、とあるお城のパーティー会場……そして、私がよく知っているシーン……。

この場所……いや、この世界を私はよく知っている。なぜならここは、私が生前にプレイしていた乙女ゲーの中の世界だからだ。そして私はどういふ訳か、このゲームの悪役令嬢へ転生してしまった……。

本当であれば私は、このゲームのヒロインに王子を取られて、失意にくれるだけの存在。いわゆる噛ませ犬に過ぎない。だけど私は未来を知っている。みすみす、ただの噛ませ犬に成り下がるつもりなんてない。

王子は私と婚約をしていて、このパーティーが終わったとき、正式な婚姻関係を結ぶことに

なっている。

だけれど、このパーティーで私が少し席を外している間に、王子はヒロインであるエマに迫ってエマも王子に思いを告げる……そして王子は、私と婚姻関係を結ぶ直前でそれを破棄し、波乱が起こるといふのが、本来のこのパーティーイベントの概要だ。

逆に言えば、私がパーティーの間に席を外しさえしなければ、エマと王子がくっつくこともない。つまり、私が離席する原因さえ断つてしまえば、もう王子を取られることは無いのだ。

「やあ、良く来てくれたエマ。待っていたよ」
「ええ。まさか、来ないのではないかと思ってしまいましたわ」
「すみません王子、ローザさん……馬車が遅れてしまって、今し方到着したところで……」

そう言って、本来の主人公であるエマが私の前に現れ、そして王子と私が囲っているテーブル

ルに彼女も着いた。ここからが、正念場……。

私は少しだけ深呼吸をして、それからテーブルクロスの中にそっと手を忍ばせ、ドレス越しに自身の秘部をさすった。

そして、指先にふわっと柔らかい感触を確かめると、私は小さく安堵のため息を吐く。

ああ、おしっこがしたい……少しずつ膀胱が圧迫されて、尿道がじんわりと熱くなり、お股がヒクヒクと疼く……それでも私は、トイレに立とうとはしなかった。

元々のゲームで、悪役令嬢ローザがこの場から離席する理由は、もよおしたせいでトイレに行くためだ。つまり、トイレでおしっこしてる最中に王子を寝取られてしまうという、なんとも情けない話なのである。

でも、トイレに行っている間に王子を奪われてしまうと分かっているなら、このパーティーの間にトイレへ行かないようにすれば良い……。そう考えた私は、トイレ対策のため、あらかじめおむつを穿いてこのパーティーに参加した。

おむつにおしっこを済ませてしまえば、トイレに立つ必要も無い……つまり、エマが王子を奪う暇も無くなるのだ。

それに、おむつをしているから、いざこざでしてしまっても大丈夫という安心感があり、そこそこ尿意は強まっているが、まだ我慢できるという希望が心の中で芽生えているかのごとく、気持ちには穏やかでいられた。

「あら、エマさん。グラスが空いていますわね。もっと遠慮せずに飲んで構いませんかのよ」

「す、すみません……頂きます」

自分は予め未来を知っているのでトイレ対策をしてきたが、未来を知らないエマは流石にそんなことはしていないだろう。だから、私は敢えてエマに沢山お酒を飲ませた。

エマだって人間なのだから、沢山飲めば当然彼女もトイレに行きたくなるだろう。そして、彼女の生真面目な性格上、そう簡単にトイレへ行きたいとは言い出せない。

ここでエマが、おもしろなんて大きな失態を犯せば、王子はエマに幻滅し、彼女と結ばれたとは思わなくなるだろう。

「あの、すみません……私、おしっ……いえ、落とし物をしてしまったみたいで……ちよつと、見えて良いですか……？」

「ああ、それなら私も一緒に探してあげますわ。二人で探した方が早く見つかるでしょうし」

「えっ……そ、そうですね……」

予想に反し、言葉を換えてトイレに行こうとするエマ。だが、このまま彼女をトイレへ行かせるわけにもいかない。

そこで、トイレに立とうとするエマと一緒に私も立ち上がり、王子を一人残してテーブルから離れた。

「あの、ローザさん……私、その……本当は……」

「分かっていますわ。殿方の居る前では、込み入った話も難しいですし……女の子同士、楽し

くお話ししましょう？」

「えっと……その……」

「あら、まさか私との談笑をお断りになると？」

「い、いえ！そう言うわけでは……」

「では、良いですわよね？」

エマは私に逆らえず、ただ黙って頷くしか無かった。

「ところでエマさんは、あまり裕福な家庭の出ではないと聞いていますが、普段おしっこはどこでされていますの？」

「えっ……？お、おしっこですか……？それは、もちろん……トイレです……」

「意外ですわね。てっきり、おトイレも無い環境かと思っていました。普段からおトイレでおしっこできるなんて、かなり恵まれているのですわね、エマさんは」

「そ、その……昔居た貧民街だと、トイレはありませんでしたが、汚くて使えなくて……がれきの影や、森まで行っておしっこしたりしていました……」

「ですが、今使っているおトイレも綺麗なんですの？それに座り心地もよくないと、おしっこもしづらいでしょう？」

「そ、そうですね……木組みのトイレだとたまにササクレがあつて、痛かつたりしますし……」

「それは大変。うちのおトイレであれば、そのようなことはありませんし、そもそも座り心地も良いんですよ。よろしければ今度、うちのおトイレまで、おしっこしに来ませんか、エマさん？」

「ええ！？おしっこしに……ローザさんの家へ……？」

「そうですね。うちのおトイレでおしっこしてみたくはありませんの？」

「そ、それは……その……したいですけど……おしっこ……」

エマの尿意を促すよう、私は執拗に彼女へ『トイレ』や『おしっこ』の話をし続けた。

その言葉に彼女の体は敏感に反応しているようで、トイレやおしっこと言葉を発する度、エマは体を小さくビクつかせた。

「では、二人で一緒に、おしっこしましょう？」

自分で言ったその言葉に、自分の体が反応した。そして、栓が抜けたかのように、私の秘部から金色の排泄欲が吹き出した。

それは、暴れ回る尿意に悶え、生まれ立ての子鹿のようにプルプルと震える私の秘部を優しく包んでくれていた、おむつという名のゆりかごの中に解き放たれ、それを汚していった……。

お股を覆うおむつは、じわじわと温かくなり、他の貴族達にも負けない煌びやかなドレスの中で、もこもこ少しずつ大きくなっていく……。

「ふ、二人で……その……」

「恥ずかしがらないで。おしっこしたら、すごく気持ち良くて……スッキリしますわよ？」

貴族や王族達の集まるパーティー会場の中で、こんなにも堂々とおしっこを漏らすなんて……

それは、大きな背徳感であると同時に、どこか不思議な高揚感……気持ちよさがあつた。

「あ、あの……ローザさん……私、その……今、ほんとにおしっこしたくて……！トイレ行かせてください！」

「あら、貴族達の集まるパーティーでトイレに離席だなんて、マナー違反ですわよ？」

「そ、そんな……！」

「大事なパーティーの前に、トイレは予め済ませておくこと。常識ですわ」

おしっこの話を散々聞かされ、その上トイレが禁止と聞かされたエマは、かなり絶望を味わったことだろう。その証拠に、今にも泣きそうな目で彼女は私を見やった。

そんな彼女を見ながら、私はおむつの中へ優雅におしっこを済ませつつ、段々と満たされていく排泄欲の気持ちよさに舌鼓を打っていた。

ああ！おしっこしたい時に、おしっこができるって、何て素晴らしいのかしら！

例えそれが、おむつの中におもらししているという状況であっても、私にとっては、おしっこをしているのと何ら変わりはない……。

アレだけ我慢していたおしっこを一気に出して
いるのだから、それが気持ち良くないはずが
ない。

一方で、私から婚約者を奪おうとしている不
届き者は、激しい尿意に苦しみ、顔を歪ませ、
ドレスの中でモジモジと脚をすりあわせている。
まあ、せいぜい必死におしっこを我慢してい
れば良いわ。いつまで、その我慢が続くか、見
届けてあげようじゃない。

貴方と私……ここで勝利の差をつけたのは、
おむつをしているかどうか。

おむつをしている私は、例えおもらししたっ
て、おむつが全部私のおしっこを吸ってくれる
から、何ら問題は無い。

でも、おむつをしていない貴方は、その尿意
にも私にも勝てやしない。いずれ膀胱の限界に
届し、王子や貴族達の前で、みじめにパンツで
おもらしすれば良いのよ！

「あら、すっかり王子をお待たせしてしまいま

したわね。そろそろ席に戻りましょうか」

「……そうですね……」

おむつの中に最後の一滴を出し終えた私は、
そう言って激しい尿意を我慢するエマと共にテ
ーブルへ戻った。

おもらしおむつを穿いたまま椅子に座ったせ
いで、おむつがプシュッと音を立てて潰れて、
お尻に少しばかり濡れた嫌な感触がしたけれど、
トイレへ行ったが為に王子を奪われることに比
べれば、こんなのはまだ我慢できた。

それから暫く、王子と二人で会話を楽しんだ。
エマもどうにか会話に入ろうとはしたが、尿意
がヤバすぎて脳の処理がそっちに持って行かれ
ているのだろう。テーブルへ戻ってからは、ほ
んど王子とまともに会話はできていなかった。

「……だめ……もう……」

かなり小さな声で、エマはそう言った。王子

は気付かなかったようだが、私にはかろうじて
その声が聞き取れた。

いよいよエマは決壊する……そうならば、き
つと王子もエマに幻滅して、余計彼女へ乗り換
えようなんて考えないだろう。これで、運命は
変わったんだ……。

そう思った時だった……私の頭の中で、前世
の記憶……この乙女ゲーをプレイした時のこと
が蘇った……。

エマは貧民だったこともあり、あまり頭も良
くなく、ドジで天然なところもあった。けれど、
すごくひたむきで何事にも一生懸命で……すご
く健気なのに不幸な目ばかり遭って……幸せ
になっただけ欲しいって思っていた。

プレイしていくうちに、私はエマにとっても感
情移入していて、彼女が王子と結ばれたときは
自分のことのように嬉しかった……。

だけど私は今、そのエマを苦しめている……
トイレへ行かせず、ずっとおしっこを我慢させ
続けて……。

ここでもしおもらしなんかしたら、彼女はどうなるのだろうか……？

お城のパーティーでもおもらししたなんてなれば、その噂はすぐに貴族や王族達の間にも広まるんじゃないだろうか？

そうなったら、もはや誰も彼女と結婚したいだなんて、思わなくなるのでは？

……気が付いたとき、私は水の入ったグラスを倒し、エマのドレスを濡らしていた。

「ああ！ごめんなさい、エマさん！少しドレスを拭かないといけませんわね。ちよっと拭いてあげるから、こつちへいらっしやい」

「えっ、えっ……？」

困惑するエマを引っ張り、そのまま二人でパーティー会場を飛び出した。

それから、近くのトイレまで連れて行くつもりだったが、生憎とパーティーでみんな酒をあおっているためか、トイレはとても混雑していた。

ちらつとエマの方を見るとかなり苦しそうに息を吐き、顔中に冷や汗を掻いている……とても、こんな行列のトイレに並ばせて、我慢できるとは思えない……。

こうなったら奥の手だ。私はエマを連れて城の外へ行くと、城下町まで出て、近くにあった無人の馬車へ乗り込んだ。

「あ、あの……ローザさん？どうして、こんなところに……」

「良いから、少しそこで大人しくしてて！」

私はその場でドレスを捲り、おもらしたおむつを脱いだ。

そして、真っ黄色にそまり、ウンザリするほどおしっこ臭くなっていたおむつを、馬車の床へ置いた。

「一度使っちゃったけど、もう一回分のおしっこぐらいなら、きつと吸収できるはず。私が一回おしっこしちゃったから、臭いし汚いけど……」

……我慢できないなら、もうそのおむつにおしっこしちゃいなさい」

「あ、ありがとうございます、ローザさん！」

そう言うと、エマは私が床に置いた使用済みのおむつを持って、パンツも脱がずにそれへ両脚を通して、そのまま穿いてしまった。

「んんっ！……はあ……まにあった……」

元々、黄色くてブヨブヨになっていたおむつの中に、エマは思いつきおしっこを漏らした。そして、使用済みだったおむつは余計に黄色く汚れ、はち切れそうなほど、タブンタブンにふくれていく。

「な、何をやっているの！？床に敷いたまま、そこめがけておしっこすれば良いのに……！」

「ですが、それだとおしっこを零して、馬車の床を汚してしまうかもしれませんし……」

「でも、私が一回したやつなのよ！？そんな汚いものを穿くなんて……！」

「大丈夫です。子供の頃は下着の替えも手に入らなかったで、ずっとおしっこで汚れたパンツを穿いて過ごしてきましたし。それに、私みたいな貧民のならともかく、お嬢様であるローザさんのなら、そんなに汚くないですよ」

「そ、そういう問題じゃない……！そもそも、なんでパンツを穿いたままおむつを……！」

「ごめんなさい……脱ぐの間に合いそうになかったの……」

直接見ることはできないが、それでも目の前でエマがおしっこをしているおむつの内側には、彼女がさつきからずっと穿いていたパンツが、そのままの状態で取り残されている……。

パンツの内側から留処なくエマのおしっこがあふれだし、パンツをびしょびしょに濡らして、パンツから漏れ出たおしっこは、パンツを覆うおむつの中に吸収されて……でも、そのおむつでさえ既に私のおしっこをたっぷり吸収していて、もうそこまでエマのおしっこを吸収できるだけの余力はないはず……。

つまり、おむつの中にも吸収しきれなかったおしっこが溜まって、彼女の穿くおむつはさながら、おしっこを入れた金魚鉢のようになっていてに違いない。

そんな、おしっこでイッパイの『おむつ鉢』の中に、パンツを穿いたまま下半身を突っ込んだとなったら……ただおもしろをした以上に、パンツは酷くおしっこまみれになっているんじゃないだろうか……。

しかし、当のエマはとても良い笑顔をしていました。他人の使用済みの汚いおむつを、あまつさえパンツの上から穿いて……びしょびしょのおむつを穿くのさえ生理的に嫌なものだというのに、他人がおもしろししたおむつなら、尚更嫌なはずだ。

しかもそれをパンツの上から穿いたら、その時点でパンツを汚してしまう……その状態で、自分もおもしろしなかしたら、おむつの中が如何に悲惨な状態になるかなんて、誰にだって分かる……想像するだけで、恐ろしく汚らしいことなのに……。

エマはただ、おむつにおしっこが間に合った……ただそれだけの理由で、こんな状況下においても、まぶしいぐらいの笑顔を私にみせてくれている……。

「ふう……スッキリしました。ありがとうございます、ローザさん。おかげで、助かりました」

エマは屈託の無い笑顔でそう言うが、この状況で助かったと言えるのかは、私自身謎だった。

「ローザさんは、優しいんですね。トイレへ行きたいのに、言い出せない私を助けてくれて……」
「……それは嫌味なの？私はさつきまで、貴方をトイレへ行かせないようにして、おもしろさせようとしたの？」

私の言葉にエマは少し黙り込んだが、神妙な面持ちで答えた。

「私は、貴方が王子の婚約者だと知りながら、

王子に好意を寄せてしまった……許されないことをしたのです。だから、恨まれるのは当然……なのに、貴方はおむつを貸して、おもらししそうな私を助けてくれた。なのに、貴方に感謝や申し訳なさ以外に、何の感情を抱くことができるとは……」

エマの言葉に、私は何も言い返せなかった……確かに私は、王子を私から奪おうとする彼女が憎かった……でも、エマが本当はどんな娘なのかを私は知っている……それなのに、彼女のかを私は壊そうとした……なのに彼女は私を恨もうともしないなんて……。

さつきまで、おしっこを我慢して苦しむエマの姿を見て、心の中で笑っていた私が、今となってはとても恥ずかしい……。

「ローザさん。このおむつは私がこのまま持ち帰って処分します。貴方はパーティーへ戻って、王子と幸せに暮らしてください」

「おむつの処分なんて、後でもできるわ！だから、貴方も一緒に戻りなさい！」

私がそう言うと、エマは恥ずかしそうにおむつを下ろし、そしておしっこでびしょびしょになったパンツを見せた。

「ダメですよ。見ての通り、私はパンツをこんなに汚しちゃって……それに、すぐくおしっこ臭くなっちゃったし……。こんな状態でパーティーになんて戻れません」

「替えのパンツぐらいなら、すぐに用意するわよ！」

私の言葉にエマは首を横に振った。

「私は、ローザさんにおむつを貸して貰えて本当に嬉しかった。だから、せめてこれぐらいの恩返しはさせてください。……ダメですか？」

エマの純粹で無垢な微笑みに、私は何も答えることはできなかった。

そうだ……この娘は、こういう娘だった。純粹で人を疑うことを知らないで……悪意を持っている相手さえ、いとも容易く許してしまう……。

「では、私はこれで失礼します。今夜は本当にありがとうございました、ローザさん」

そう言って、タプタプになったおむつを穿いたまま、エマは夜の城下町を去って行った。

その後ろ姿を見て私は、彼女へ小さく『ありがとう』とつぶやいた……。

マジカル・ラッキー☆チャーミング く神様からのきまぐれで
【催眠】能力を授かったので、ツンな生徒会長に使ってみたら〜

平野月子

『おめでとう！ 坂井^{さかいともや}俱也、そなたは、全人類の中からたった一人、神力のモニターに選ばれたのじや！』

絵に描いたザ・仙人、みたいな見た目の老人が俺の前に現れた。これは夢だな。俺は瞬時に判断する。

『えーつと、どちら様でしょう？』

『ワシは神様じや！』

仙人じゃなくて神様だったらしい。まあどつちでもいい。

『はあ、そうですか。それで、ご用件は？』

『はあ、とはなんじやっ！ もっと驚かんかいっ！』

人の夢に勝手に出て来てぎゃあぎゃあ喚かないで欲しい。今日はソシャゲのし過ぎで夜更かししてしまったので、早く寝ないとまづいのだ。つて、夢を見てる時点で俺はもう寝てるつちや寝てるんたけど……でも、俺は夢の中で、疲れるようなことは一切したくない。

『あー、そうですねー。神様に会えるなんて、ビックリですー。まるで夢みたいだあー』

俺が棒読みでそう言うと、自称神様は『そうじやろ、そうじやろ』と満足そうに頷いた。

明日も寝坊して遅刻したら……今週は一週間、毎日遅刻し続けたことになる。そうなると、うるさいのだ。朝比奈^{あさひな}凜香^{りんか}という名の、生徒会長をしている同級生が。なので、なんだかよくわからないものにはさっさ

と退散してもらおうことにする。

『で、ご用件は？』

『そなたに、神力が籠ったお守りを授けよう』

『わあ、嬉しいなあ！』

夢でもらつても、目が覚めたらどうせ使えないだろうからどうでもいい。

『使い方は……』

『あ、紙にでも書いておいてもらえれば、後で読んどくんできー』

勿論、読むつもりなんてない。どうせ目が覚めれば消えてなくなっているだろうし。

『いや、でも……』

『だつて、俺、忘れっぽくてー。今説明されても、起きたときには忘れちゃってると思うんつすよねー。だから、大事なことだけ紙に書いておいてください』

『ふむ……それもそうじやな。では、特別に取扱説明書もつけておいてやろう！』

『あざまっす！ じゃ、用件が終わったようなので俺はこれで……』

そう言つて、俺はひらひらと手を振った。

『用事があるときは、隣の山頂にある神社で「神様神様、お話を聞いてください」と言うといいぞ！ ちなみに、お賽銭が多ければ多いほど早く対応するぞい！』

『はーい』

俺は適当に神様とやらに返事をして目を閉じた。夢の中だろうと二度寝してやる。気合を入れて寝た成果もあり、俺はその夜はぐっすりと眠れた。そして、たつぷりと気持ち良く睡眠を貪った俺は、案の定、翌日

しつかりと寝坊したのだった。

「ちょっと坂井!! また今日も遅刻したでしょ!!」

「あー、なんか、目覚まし時計が鳴らなくて?」

俺はへらつと笑って言った。内心では『それでおまえに何か迷惑かけたかなー? かけてないよなー? それなら放っておいてくれないかなー』と思っただけ。女の子には優しく! これが俺のモットーだからなつ。

結局、今朝目覚めたのはなんといつもよりも三十分も遅い時間だった。当然、本日も遅刻である。急いで学校に行くことは諦めた。だってどうせ急いでも間に合わないし。俺は無駄なことはいらない主義だ。そんなことよりも、俺の興味を引くものが机の上にあった。

——お守りだ——

こんなものは、確かに昨日まではなかった。金の刺繍が施された紺色の袋の上部は、白い紐で閉じられていて、その紐はグルグル巻きのリボンみたいになっている。誰がどう見てもお守りだ。持ち上げると、ハラリとメモ用紙みたいなのが落ちてきた。

【使い方:意中の相手の身体の一部(髪や爪等)をお守りの中に入れ、《言葉》で話しかければ意のままに操れるようになる】

はい? 俺はもう一度メモ用紙を読み返した。

【使い方:意中の相手の身体の一部(髪や爪等)をお守りの中に入れ、《言

言葉》で話しかければ意のままに操れるようになる】

何度読み直しても、目を擦っても、裏返しても、メモに書いてある内容は変わらなかった。どうやら俺の勘違いでも読み間違いでもないらしい。

なんだかよくわからないけれど、お守りの中に髪か爪を入れた相手を催眠状態にできるお守りってことのようにだ。神様、いったい俺に何のモニターをさせようとしてるんですか?

使う予定もなかったけれど、俺はなんとなくそのお守りを制服のポケットに突っ込んで登校した。

のんびりと学校に行つたので、一時間目も終わってしまっていた。二時間目が終わってから教室に入つたら、さっそく生徒会長に見つかって怒られた。ていうか、遅刻を叱るのは先生の役割であって、生徒会長の仕事ではないと思うんですけどね。そーゆーの、越権行為っていうんですよー。

三時間目が始まる直前までしつかりとオレに説教をしてみた朝比奈が立ち去った後、俺は机の上に長い髪の毛が一本だけ落ちていることに気づいた。

もしかして、これって朝比奈の髪の毛か?

いつもであれば、手で払って机の下に落として終わるところだろう。だけど、今日は違う。あのお守りの効果を試すには、絶好の機会では……? ゴクリと俺の喉が鳴った。

始業のチャイムが鳴って、間を置かずに教師が入ってきた。問題は、この髪の毛をお守りにいつ仕込むかだ。この授業を最初から最後まで真面目に受けていたら、俺はこの細い髪の毛をなくしてしまうかもしれない

い。そして次の休み時間も、他の誰かに絡まれてもしたら……ミッション難易度がどんどん上がってしてしまう。それは良くない。今、このミッションを完遂させるためには……俺は考えた。授業開始のあいさつをしている間中考えた。そして、クラスの他の生徒が着席する瞬間、俺は決心した。

「すみせん、お腹が痛いのでトイレに行つてきますっ！　すぐ戻るんでっ！　あと、あいさつの時間はここに居たんで遅刻もなしにしてくださいー」

俺はそう言い放つと教室を飛び出した。勿論、手には朝比奈の髪の毛を握っている。

廊下を早足で進んで、トイレに駆け込んだ。授業開始直後のトイレは無人だった。俺は手に入れた朝比奈の髪の毛を手に突っ込む。メモ用紙によると、多分、準備はこれでいいはず。あとは、《言霊》っていうのがよくわからなかったけれど、試すチャンスはきつとあるだろう。

俺がウキウキしながら教室に戻つたら、ちょうど小テストが終わったところだった。あー、小テストねー。そんなあるって言ってたっけ？　今頃になって思い出したオレは、勿論、勉強なんてしていない。図らずも小テストを回避した俺は、心の中でガッツポーズを取りながら自分の席に着いた。教室に入ってからずっと、朝比奈からの視線が痛い。だけど、俺はそれをさらりと受け流す。だって俺には今、あのお守りがあるのだから。《言霊》さえ使えれば、俺は朝比奈のことを好き勝手にできる力を手に入れたのだ。次、何かうるさく言われたら、教室のみんなの前で辱めてやる！

「さっきのはいったい何なのよっ！　トイレくらい、休み時間に行つて

おきなさいよ。小学生じゃないんだから！　どうせ、テスト勉強してないことを思い出して逃げたんでしょ!？」

俺はニコニコしながらその小言を聞き流す。トイレに行くための休み時間を全て説教で潰してくれたのは、どこの誰だ？　と内心ツツコミを入れながら。あ、全然聞き流せてないな。でもまあいい。

お守りの力を試す機会が向こうからやってきたわけだ。だから、あとは《言霊》を使って……って、どうやって使うんだ？　でも、《言霊》というくらいだから、なんかそれっぽいことを言って命令してみればいんだらう、きつと。オレはそう雑に結論付けた。

「あ、朝比奈ごめん。ちょっと《右手を上げて》」

「え？　何よ」

俺が指示した通りに朝比奈が右手を上げる。朝比奈はきよんととしていた。しかし、これで催眠が成功したのか、それとも脈絡はないものの俺のセリフに反射的に従ってしまっただけなのか、判別がつかない。それなら、朝比奈が自分の意志では絶対にしないようなこと……

「いや、なんか虫が止まってたように見えて……でも気のせいだったみたいだ。そんなことより朝比奈、休み時間中ずっと俺に構ってるけれど、そんなことしたら朝比奈こそトイレに行く時間がなくなっちゃうよ。そしたら、教室で《お漏らし》しちゃうんじゃないかな？」

「……っ!!　な、何言ってるのよっ!!」

真っ赤になって、数秒間身体をふるふると震わせた朝比奈が、我に返って叫ぶ。今のは失敗だったみたいだ。

説教中に漏らしたらきつとものすごく恥ずかしいだろうな、と思つてそう言ってみたわけなんだけど。残念ながら、何も起こらなかった。朝比奈にして欲しいことを念じながら言葉を発したら、その部分だけ言葉

がゆがんだような、確かな手ごたえがあったんだけど……

《言霊》に関しては、もう少し研究が必要なようだ。

その後も、朝比奈は休み時間ごとに俺に小言を言いやって来た。そのたびに《後ろを向いて》とか、昨日の晩御飯は何だったか《教えて》とか言ってみたけれど、朝比奈は首を傾げながらも俺の指示したとおりのことをしてくれた。うーん。だけど、これだと朝比奈が素直なだけなのか、《言霊》が使えているのか、どちらなのかわからないな。

午後になったら、全員、体育館に集まるように言われた。全校集会だ。もうすぐ文化祭があるので、それについての説明があるらしい。校長からの定型文みたいなあいさつの後、朝比奈が壇上上がった。生徒会長として、全校生に具体的な説明をするようだ。

そういえば、《言霊》って、相手に声が届いていなくても使えるものなのかな？ 俺はちよつと試してみたくなって、小さな声で呟いた。

「朝比奈、《スカートをめくれ》」

凜とした態度で文化祭について説明をしていた朝比奈が、突如、演台の前に出て来て、おもむろにスカートをめくりあげた。全校生徒の前で、自らの手でスカートの中を晒す。

「え……？」

朝比奈は、そのポーズのまま自分の行動に呆然としているようだった。何が起こったのかわからない、といった表情で、スカートの裾を持ち上げたまま硬直している。全校生の視線が朝比奈のスカートの中に集まる。俺もその様子を見て息を飲んだうちの一人だった。

朝比奈が履いていたのは、セクシーパンツでも、清純パンツでも、縞々

パンツでも、水玉パンツでも、いちごパンツでもなく——おむつだった。

「何してるんだ!？」

「いやあつ……!？」

先生の声で我に返った朝比奈が、小さく叫び声を上げてその場から逃げ出した。オレは慌てて体育館を飛び出して、朝比奈の後を追った。

朝比奈は体育館の裏で捕まえることができた。

「何よ! 私のこと、笑いに来たのっ!？」

朝比奈の顔は涙でぐしょぐしょだった。

「あの、ごめん……」

「あなたに謝ってなんでももらいたくないわよっ」

「でも……今のは、完全に俺の所為だし……!？」

「はあつ!? 何言ってるのよっ」

「ちよつと、こつち来て」

いつまでもここに居たら、他の誰かに見つかってしまうかもしれない。二人きりになれる場所は……と考えると、俺は朝比奈をクラブ棟に引張っていった。

学校から部活動として認められている部には、クラブ棟内に部室がもらえる。俺は園芸部の副部長をしているので、部室の鍵を持っていたのだ。ちなみに、俺は部員ではあるけれど、活動らしい活動は何もしていない。つまり幽霊部員だ。部活として認められるには五名以上の在籍が必要で、部員が足りないからと頼み込まれて名前を貸した、ただそれだけだ。世の中は、持ちつ持たれつだからな。実際、活動しているのは部長一人だけで、俺以外の後の三人も幽霊部員だ。ということで、俺は名ばかり副部長というわけなのだが、このときばかりはそのおかげで部室の鍵を手

にしていたことに深く感謝した。

まだ全校集会中なので、当然、クラブ棟には俺達以外は誰もいなかった。朝比奈を園芸部の部屋に案内する。ここに入ったのは俺も初めてだ。入口の案内図がなかったら辿り着けなかったかもしれない。だって、鍵を預かっているだけで、一度も来たことがなかったのだから。危ないところだった。

「……さっきのが坂井のせいって、どういうことよ」

俺達は、部屋にあったパイプ椅子にそれぞれ腰掛けた。

「じつは、俺、神様からすごい力をもらっちゃって……」

「はあああああ!? あんた、何言ってるの!? ばっかじゃないのっ!?」

朝比奈にすごい剣幕で怒鳴られた。あ、間違えた。今の言い方はナイわ。自分でも厨二病を全開で拗らせたのかと疑ってしまふような発言だった。

「あ、いや、そうじゃなくて……あ! そうだ。これなんだけど……」

百聞は一見にしかず。俺はあのお守りを朝比奈に見せることにした。

「何よ、それ」

「神様に貰ったお守りなんだけど」

「まだその設定使う気なの？」

「まあ、そう言わずに。朝比奈、《両手を上げて》」

俺の言葉に従って、朝比奈はバンザイをした。

「次は《俺のこと好きって言って》」

「坂井、好きよ……」

慌てて朝比奈は口を塞ぐ。

「どう、わかった……?」

「坂井、一体私に何をしたのよ……!!」

「だから、さっき言ったじゃん。『神様からすごい能力をもらった』んだって」

朝比奈が目を見開く。

「その能力って……」

「朝比奈のことを自由自在に操れる能力」

俺はニヤリと笑った。

「なっ……」

朝比奈は絶句した。

「そ、それじゃあ、さっきみんなの前でスカートを捲らせたのは……」

「そう、俺」

朝比奈は俺のことを睨みつけた。

「でも、朝比奈は俺のこと好きだから《許して》くれるよな?」

「す、好きって……」

「さっき俺のこと好きって言ったじゃん。ほら、もう一回《好きって言えよ》」

「わ、私は坂井が好きよ……」

「だから、《許して》くれるよな」

俺の《言霊》に朝比奈は頷いた。やった! これで俺はお咎めナシだ!!

俺は心の中でガッツポーズを取った。

「さっき、スカートを捲ったときに履いてたのは、パンツじゃなかったみたいだけど?」

俺の見間違いないかなければ、あれはおむつだった。しかも、子供が履くみたいな可愛い柄までついていた。

「ねえ、《教えて》」

「お、おむつよっ!! 私はパンツじゃなくて、赤ちゃんみたいなおむつを履いてたのっ」

朝比奈は泣きそうな声で言った。よし、これで何があっても俺は朝比奈の弱みを握ったことになるから、これからは説教なんてさせないぞ。

「……あれ? もしかして……」

俺はそのとき、ふと閃いてしまった。

「朝比奈って、朝からずつと、おむつ履いてた?」

ふいつと朝比奈が視線を逸らす。凶星だったみたいだ。

なるほど。だから、最初に《お漏らし》の《言霊》を使ったときに、

朝比奈はお漏らしをしなかったんだ。だって、朝比奈が履いてたのはパンツではなく、おむつだったのだから。あのとき、俺の《言霊》によって引き起こされた朝比奈の粗相は、誰に知られることもなく、おむつに吸い取られていったわけだ。

「なあ、なんでおむつなんて履いてるんだ?」

朝比奈は固く唇を引き結んだままだ。《言霊》を使わないと朝比奈は教えてくれないらしい。それなら……

「なんでおむつを履いてるのか、《教えて》」

「っ……!! す、好きなのよ……」

「好き……?」

「だって、おむつって可愛いし、履いてると安心するし、それに……」

「え、聞こえなかった。もう一回《言って》」

「だっ、だからっ……おもらしたら、気持ちいいから好きなの……」

消え入るような小さな声で朝比奈は言った。俺はゴクリと唾を飲み込む。

「お、おもらしたら気持ちいいんだ……」

「繰り返さないでよっ」

朝比奈はとても可愛い。いつもは俺に口うるさく突っかかってくるからそこに注目する気になくなってしまったけれど、黙ってれば美少女だ。初めて朝比奈を見たとき、いつもやってるソシヤゲのお気に入りキャラクターがスマホの中から出て来たんじゃないかって、思わず二度見してしまっただけだ。そんな彼女が、おむつを履いて気持ち良くなっちゃう姿を俺は想像してみた。うん、結構イイな。

「ねえ、それ《見せて》よ」

俺は思わずそう言っていた。

「おむつにお漏らしをして気持ち良くなっちゃってる朝比奈を、すごく見たい。ねえお願い、《見せて》」

俺の《言霊》に操られたように、朝比奈は立ち上がった。スカートを捲りあげると、部屋にあつたミーティング用の机の角に股間を擦り付け始めた。

「あつ、あつ、気持ちいい……」

角オナをしている朝比奈の目がトロロンとしてくる。俺が側にいることなんて忘れたかのように、朝比奈はその行為に没頭していった。

「ふあつ、あつ、ああん……っ!」

朝比奈が一際高い声を出したとき、しよわわわ……という水音が聞こえてきた。朝比奈が、おむつにお漏らしをしているのだ。可愛いのに気が強くて、いつも俺に説教ばかりしていて、生徒会長という皆から人望を集めている朝比奈が!!

ふるふるっと身体を震わせた後、朝比奈はまた机の角に股を擦り付け始めた。今度は、ぐちゅっ、ぐちゅっとな濡れた音までしてくる。

「はあア、気持ちいい、気持ちいいのが止まんないよおお……！」

朝比奈の目は焦点が合っていない。あまりの気持ちよさに、瞳にハートが浮かんでいるようにすら見える。

「あつ、いつちゃうつ……あ、ああつ、いくうう……」

腰を激しく動かして、角にイイトコロを擦り付けていた朝比奈が切羽詰まった声で小さく叫んで、身体を硬直させながらビクビクと震えた。どうやら、本当におむつオナニーでオーガズムを迎えたようだ。

それを見ていた俺も、なんだかムラムラしてしまった。

「なあ、朝比奈。今度は、俺のことも気持ちよくして。そのびしょ濡れおむつを《脱いで》」

机の上にくぐったりと身体を投げ出して絶頂の余韻に浸っていた朝比奈が、俺の命令に従ってのろのろとおむつを脱ぎはじめる。太腿を通り過ぎると、ボトリとおむつが床に落ちた。大量の尿を吸い込んだおむつは、その重さに耐えきれなかったようだ。俺は、ゴクリと喉を鳴らした。

「《自分でスカートと捲って、朝比奈の恥ずかしいところを見せて》」

俺に言われた通りにスカートを捲ろうとして朝比奈が振り返る。その表情を見たとき、俺は我に返った。

朝比奈は、声も出さずに泣いていた。

こんなこと、絶対にしちゃいけないことだったんだ。俺は激しく後悔した。さつき朝比奈は俺のこと好きって言っただけで、それは俺がお守りの力を使って言わせたことであって、勿論、朝比奈の本心なんかではない。

好きでもない相手に対して、女の子に命令で無理矢理こんなことさせるなんて、していいはずがない。

「ごめん。やっぱり、さつきのはナシ。朝比奈、着替えは持つてる？ 持つ

ているなら、《着替えて》」

「えつ……」

朝比奈が、ぼちりと目を瞬かせた。先ほどまで流れていた涙は、止まっていた。良かった。俺は胸を撫で下ろした。女の子を泣かせるのは、ダメ絶対。

「えつと、着替えていいよ」

《言霊》が通じなかったのかと思って、俺はもう一度言った。だけど、朝比奈は動こうとしない。

「……着替えないの？」

「着替えは、教室に置いてある鞆の中だから……」

「すぐに取ってくるから、待ってて！」

俺はそう言い残すと、慌てて教室に向かって走り出した。朝比奈の席がどこなのか、俺は知っていた。だって朝比奈の席は、俺の隣なのだから。俺は朝比奈の鞆と一緒に自分の鞆も引っ掴むと、急いでクラブ棟へと引き返した。

「このお守りは神様に返すことにするよ」

鞆を受け取った朝比奈は中から替えのおむつを取り出して、俺が後ろを向いている間に着替えを済ませた。朝比奈が着替え終わったことを確認すると、俺は朝比奈のほうを向いてそう言った。

教室に向かって走っている間、俺はどうするのが最善なのかを考えた。そして、ちょうど教室にたどり着いたとき、まるで天啓のように夢の中で神様が最後に言った台詞を思い出した。

『用事があるときは、隣の山頂にある神社で「神様神様、お話を聞いてください」と言うといいぞ！ ちなみに、お賽銭が多ければ多いほど

早く対応するぞい!」

あの時、確かに神様はそう言っていた。

俺はそのことを朝比奈に話した。俺にできる償いは、ただ一つだ。

お守りを開いて、俺は朝比奈の髪の毛を取り出す。

「勝手に使ってしまったって、ごめん」

細くて長い一本の髪の毛。俺はそれを朝比奈に返した。こんな頼りない一本の髪の毛で、俺は朝比奈の人生を滅茶苦茶にしてしまうところだった。

「俺は今からその神社に行こうと思う。だから、朝比奈もついてきてくれないかな?」

もう《言霊》は使えないはずなのに、朝比奈は俺の言葉に頷いてくれたのだった。

俺たちはバスに乗って隣町まで移動した。バスの終点は、神様が言っていた山の中腹だった。そこから先は自分たちで歩いていくしかない。

一時間くらいかけて、俺たちは山を登った。そして、山頂にようやく辿り着いたついたとき、俺たちは小さな鳥居がついた祠を見つけた。

「神様神様、お話を聞いてくださいっ」

作法なんてわからないので、適当に手を合わせてから俺は言った。

……………

しばらく待っても何も起こらなかった。そういえば、あの時、神様は他にも何か言ってたな……えーっと……

「そうだ、お賽銭だ!」

俺はポケットから財布を取り出した。ええっと、御賽銭は多ければ多いほど、早く対応……!? なんてがめつい神様だ。

俺は苦渋の決断で、財布の中から五百円玉を取り出すと、目の前の賽銭箱に投げ入れた。

「神様神様、お話を聞いてくださいっ!」

パンパンッと叩く手にも力が籠る。

手を合わせたまましばらく待ったけれど、やはりなにも起こらなかった。

「ええいつ!」

俺はやケになつて、千円札を突っ込んだ。ちなみに、この千円が俺の残りの所持金全てである。これ以上のお賽銭を求められても、俺にはもうどうすることもできない。

「神様神様、お話を聞いてくださいっ!」 つーか、早く来やがれっ!」
うっかりと、言葉の最後に心の声が出てしまった。

「ほーい、呼んだかの?」

ポンつと煙と共に、昨夜夢で見た神様が俺たちの前に現れた。

「ぎゃっ……」

神様を初めて見た朝比奈は驚いて、慌てて俺の後ろに隠れた。

その様子を見て、神様が嬉しそうにニンマリと笑ったのを俺は見逃さなかった。

「おい、神様!」

「神様に向かってなんじゃ、その口の利き方は。罰当たりな奴め」

「このお守り、返すわ」

俺は神様に、貰ったお守りを差し出した。

「え、なんでっ!?!」

神様は心底驚いた顔をしていた。よっぽどの自信作だったらしい。

「んー、俺には必要のないものだったから。それよりさ……」

俺の手から神様の手にお守りが移ったら、心が少し軽くなったような気がした。

「俺がお守りの力を使ってしたことを、みんなの記憶から消す……っていうことはできないかな？」

「それは、そこのお嬢さんがスカートを全校生徒の前で捲ってしまったことかいの？」

見てたんかいっ!? ていうか、そんなことまでわかっているなら、さっき呼んだときにさっさと出てこいっての!! もしかしたら、この神様、俺の財布の中の全財産がいくらだったかまで知っていたかもしれないな、と俺は思った。

「あれはやっちゃいけないことだった……なあ、なんとかならないかな? 難しい?」

「いや、ぜーんぜん。難しいことなんかないぞい」

「あ、そーなんだ」

良かった。と俺は胸を撫で下ろした。

「じゃ、パパッとみんなの記憶、消しちゃってくれないかな?」

「良いけど、お前たちの記憶も一緒に消えるぞ。それでもいいのか?」

「えっ……!?!」

頷いた俺と対称に、驚きの声を上げたのは朝比奈だった。

「ほお?」

それに対して、俺と神様はそれぞれ違った反応をした。

「な、なによっ……!」

俺と神様に見つめられて、朝比奈が焦った声を出す。

「あー、せっかくじゃから、そこのお嬢さんにもモニターアンケートつ

ちゅーもんにも協力してもらおうかいな」

「モニター……アンケート?」

神様に話しかけられた朝比奈が、上擦った声で聞き返す。いつも自信に溢れている朝比奈のこんな様子は珍しくて、俺はマジマジと朝比奈の様子を見てしまった。

「お前さんだったら、どんなお守りが欲しいかいの?」

「え!? えーつと、私だったら……そうね。催眠能力とか、そんな物騒なものを使えるお守りじゃなくて、もつと普通の……好きな人と必ず結ばれる、恋愛成就のお守りとかがいいと思うわっ」

何故か、俺の方をチラチラと見ながら朝比奈が言った。ほお、朝比奈は恋する女の子だったのか。意外だな。あの時、部室で思い留まって、本当に良かったと俺は心から思った。

しかし、朝比奈の好きな人は一体誰なのだろうか。日頃、俺に説教してばかりいないで、前向きに好きな人を追いかければいいのに。朝比奈は可愛いから、ちゃんと告白すればうまくいくんじゃないかと思う。

「ほほう……」

神様は朝比奈のことを意味ありげに見ては、何度も頷いていた。

「どう、参考になったかしらっ?」

赤い顔をしたまま、朝比奈が言った。想い人と上手くいくといいな。俺は心からそう思った。

「ああ、とても有意義な回答じゃったぞ。おまけじゃ、皆の記憶を消したら、お前さんたちも学校まで送り届けてやろう」

神様がそう言うのと、パンツと手を叩いた。頭に霧が掛かったように意識が不明瞭になって、ぐにやりと視界が歪む。

「ふたり、いつまでも仲良くな」

最後に、そう聞こえた気がした。

気が付いたら俺は学校の体育館にいた。全校集会だなんて、退屈すぎてちよつと眠ってしまったみたいだ。壇上を見れば、朝比奈が文化祭について説明している。

うちの学校では、行事はだいたい生徒会が中心になって動くことになってる。文化祭だけじゃなくて、体育祭とか、音楽祭とか、球技大会とか、全て生徒会の担当だ。そんなの絶対忙しいに決まっている。なのに、何で朝比奈はいつもあんなに俺に構ってばかりなのだろうか。本当、バイタリティ溢れるヤツだ。俺にとっては迷惑この上ないことだが。いつか、朝比奈の誰も知らないような秘密を握って、ギャフンと言わせてやろう！俺が心の中で密かに決意したとき、ふと、とあるビジョンが頭に浮かんできた。

——それは、子供用のおむつを履いた朝比奈が、恥ずかしそうにスカートをまくり上げてオレを見つめている姿で——

いやいや、一体なんでそんなのを思いついてしまったんだ、俺はっ!!
俺は変態じゃないっ!! 断じて変態じゃないぞー!!

ぐつと拳を握りしめながら壇上の朝比奈を見上げると、何故か朝比奈が俺のことを睨みつけていた。なんだよ、壇上からでも俺がちよつと居眠りしてしまっただのが見えていたっていうのかよ!! いったい、朝比奈にはどんなセンサーがついているんだか。しかし、そんなしつかり者の朝比奈が、頼りなさげに子供用のおむつを履いていたら、きつと可愛いんだろうな……ギャップ萌えっていうやつだろうか。はっ、いかんい

かん。俺は何を考えてるんだっ!!

ぶんぶん頭を振って、俺は妄想を振り払った。

朝比奈は、そんな俺の様子を壇上から冷ややかに見ていた。

それから毎日、朝比奈は俺の粗探しをしては休み時間のたびに小言を言ってきた。それは、今までと同じ日常だったのだけど……一つ変わったことと言えば、俺が朝比奈の顔を見るたびにおむつを履いている姿を想像してしまうようになってしまったことだ。おむつを履いた朝比奈が見たい、いやいや、俺は一体なにを考えているんだ!! そんな葛藤を抱えているのが、朝比奈にバレたのか、どこぞの神様にでもうっかりと願いが伝わってしまったのか……

俺がおむつを履いた朝比奈の姿を、ようやく頭の中から追い出すことに成功するかと思われた頃、偶然、朝比奈のおむつを履いた姿を見せまうことになるとは……この時はまだ、知る由もなかったのだ。

おわり

フリースペース参加させていただきました!

参加時には、漫画やイラストなど
何点か予定していたのですが、
リアルが多忙になりまして…

どうしても制作時間が持てず、
お恥ずかしながら、こちらの
一点を仕上げるのみとなりました。

TwitterやPixivの活動もできず、
心苦しい思いでいっぱいでした。

少しずつではですが、
創作の再開準備をして
いますので、
何卒宜しくお願いします。

最後になりますが、
【おむつつ娘PARTY!8】の
発刊おめでとうございます!

ジョン・マロ



ファイライン ベイビーズ
Feline Babies

可愛い大人の赤ちゃんのための
ベビールックファッション

おむつカバー・布おしめ・ベビーハット・スタイ・ミトン・ロンパース etc...

■お取り扱い店舗一覧■

☆秋葉原ラブメルシー☆

〒101-0021 東京都千代田区外神田1-2-7

JR秋葉原駅 電気街口出て徒歩1分

☆DEEP☆

〒460-0013 名古屋市中区上前津1-3-14

名古屋地下鉄上前津駅7番出口スグ

☆利根書店 深谷店本館☆

〒366-0033 埼玉県深谷市国濟寺577-1

国道17号沿い いっちよう様向かい

最寄駅：JR高崎線 深谷駅から2km

最寄IC：花園IC

☆利根書店 前橋野中店☆

〒379-2166 群馬県前橋市野中町278-6

国道50号沿い Bウエーブ様となり

最寄駅：前橋大島駅から徒歩18分

最寄IC：駒形ICから車で10分

☆大人のおもちゃ通販大魔王様☆

※通販のみ

■コラボレーション■

☆三和出版☆

☆おとなの保育専門店『B' Fles』☆



<http://fb.omport.cc/>

B'Fles X おもむ☆フエス

「おとなの保育専門店」として二〇二二年四月二十六日にランドオープンした『B'Fles(ビーフレス)』さん。皆様、ご存じですか? 「もう何回も利用している!」という方もいらっしゃると思いますが、「気になってるんだけど、まだ利用したことがない!」という方も多いはず。そこで今回は対談という形でB'Flesさんに突撃インタビューをさせていただきました!(聞き手:平野月子)

——まず、お店について、オーナーの美咲さんにお聞きしました。

平野 設立のきっかけや経緯について教えてください。

美咲 「女の子が安心して遊べるお店があつたらいいな」という声に応えました。男性向けのお店はたくさんあるのに、女の子が安心して遊べるお店って意外と少ないんですね。女の子だって遊びたいって気持ちがあるのに……B'Flesではエッチなことではないので、初めて利用する女の子にも安心して来てもらいたいなと思っています。

平野 ちなみに、男の子も遊ぶことはできるのでしようか?

美咲 勿論です! 男の子、女の子どちらも大歓迎

ですよ!

平野 お店の特徴を教えてください。

美咲 一番の大きな特徴としては、男性シッター、女性シッターの両方が在籍していることです。こういったサービスのお店では、お客様の性別によって選べるキャスト(シッター)さんの性別が固定されてしまう場合があるのですが、それはおかしいんじゃないかなって思っています。

女の子でも、お兄ちゃん・パパにお世話されたいという気持ちがあつたり、ママに甘えたいっていう気持ちがあつたり。男の子だっておんなじです。だから、お客様が、異性・同性どちらでも自由に選んでいただけるお店にしました。

平野 お店のコンセプトを具体的に教えてください。

美咲 サブタイトルが「大人の保育専門店」なんですよね。B'Flesでは、リアルな保育を目指しています。保育にはいろいろな形があると思っています。例えば、家庭保育と保育園、幼稚園の保育がそれぞれ違うように、子供がおうちでパパやママとする遊びと、保育園とかで先生やお友達とする遊びは違うはずなんですよね。その中で、好きだった遊びや絵本があつたりして。

また、おうちではおむつだけど、幼稚園や保育園では頑張つてパンツを履いてみたりとかいう記憶があつたり……

保育のイメージがどんなものかは人によって違うと思うので、お客様と事前に細かく打ち合わせをすることにしています。「どのくらいの年齢設定でお世

話をしたいかな」とか、「おむつもできるけれど、パンツでトイレトレーニングごっこもできるよ。どうしたいかな」とか。シッターさんとのやり取りの中で決めていきます。

そうやって、お客様の理想に寄り添えるようにしています。

平野 その他にこだわっているところはありますか?

美咲 リアルを追求するために、オープン前に、シッター同士でお互い離乳食を食べさせ合うとか、おむつのつけ方とか、声のかけ方とかを研究しました。

平野 シッターさんたちの反応はどうでしたか?

美咲 ベビーフードは大人になってから初めて食べたけれど、「離乳食って美味しいんだね」って感想を言ったりしていました(笑)

平野 お店がオープンしてから想定外だったことはありましたか?

美咲 おむつはこちらで用意しているのですが、おむつが初めてのお客様は自分のサイズがわからないということが時々あります。このお店でおむつデビューという方も、結構いらっしゃるのです。

でも、一度デビューしたらその後は皆さんおむつにハマってくださいませよ。

平野 お店として、今後やりたいことがあれば教えてください。

美咲 おむつはテープ・パンツ・布によって、感じ方、替え方が違うんですね。今、お店でご用意しているのはABUちゃんとLittle For Bigちゃんのテープタ

イブのみなので、今後はパンツタイプも導入したい
と思っけています。年齢が進んで、お兄さん・お姉さ
んになってくるとおむつもパンツタイプになるので
そのあたりでもリアルを追求していききたいです。

——続いて、シッターさんたちにもお話を伺いまし
た!! 今回、お話をお聞きしたのはこのお二方です。

ゆりさん(右)母性溢れるママタイプのシッターさん
俊輔さん(左)優しいお兄ちゃんタイプのシッターさん



平野 どんなタイプのお客様が多いですか?

俊輔 今のところ、全員女性です。20〜30代前半の
女性が多いですね。

平野 どんなきつかけで来られるのでしょうか?
俊輔 僕はお尻ペンペン専門の系列店にも同時在籍
しているのですが、そちらのお客様で「ちよつと興
味あるかも」という子に声を掛けたりしています。

ですので、「おむつとか赤ちゃんごっこは初めて」
っていう方が多いです。ちなみに、先日アダルトベ
イビー寄りのおむつ好きな方が来てくださったので、
お世話をさせていただいたんですけれど……その方
もおむつ初心者でした。やっぱり、「初めてうちで
おむつをつけた」という方が多いですね。

ゆり 私のお客様は、男性が多いです。女性も若干
名いらつしやいます。

平野 圧倒的に男性が多いんですね。
ゆり はい。おむつにおしっこをしたい、おむつを
替えて欲しいという願望を持った方が来られます。

ご来店の際は、最初にシャワーをお互い浴びるんで
すけど。その時に「この後、おむつをつけておいて
くださいね。つけかたはわかりますか?」とお聞き
したら、「大丈夫ですつ!!」と力強いお返事をいた
だいて。おむつに関しては心配ない方が多いかな、
という印象です。

お母さんという愛情に包まれたい、甘えたい、イイ
コイイコ、ヨシヨシして欲しい。という方が多いよ
うに思います。

平野 シッターさんによって、全然違うんですね。
びつくりしました。

——お客様に男性が多い、女性が多い、どちらも同
じくらい……等、シッターさんによって、それぞれ
なんだそうです。どんなシッターさんと遊びたいか
は、お店に相談すれば紹介してもらうことも可能だ
そうです。また、シッターさんは全員Twitterをし

ているので、事前にどんな人柄のシッターさんが在
籍しているのか知ることができます。実際、シッタ
ーさんのTweetを見て、指名される方も多いそう
ですよ。

平野 シッターをしていて、意外だったことつてあ
りますか?

俊輔 僕がというより、初心者のお客様のお話なん
ですけれど……おむつにいざおしっこしてみよう!
と思っけても、「意外と出ない」。普段から逆トイトレ
していないと、出ないものなんですよね。

「おむつを頑張つて履いたよ。お兄ちゃんの言う通
り、朝から水分を沢山取つて、膀胱もパンパン」。
でも出ない。さらに焦つちゃうと、余計出ない。

平野 そういうときつて、どうされるんですか?

俊輔 まずは、ヨシヨシ大丈夫だよつて言つて、リ
ラックスさせてあげますね。

どうしても出ないときもあるけれど、イスから立ち
上がる瞬間に出ちゃうときもあるし、お手洗いでト
ントントンつてあげたり、お風呂場でシャワーの音
を聞かせてあげると出たりすることもある。

出したいっつて思っけている方には、できるだけ出せる
ようにお手伝いしています。

平野 ゆりさんは、何か驚いた出来事はありました
か?

ゆり ごはんを食べて、はみがきをして。「お腹も
いっぱいになったし寝ようね」つて言つて、膝枕し
てトントントンしてたら、お客様が本当に寝ちゃつて。

平野 それはびつくりしちゃいますね。

ゆり 私にとっては衝撃だったんですけど、それと同時にシッターとしては本当に喜びで。ずっと撫で撫でして、トントンしてあげていたので、安心してくれたんだなあっていう嬉しさと驚きの両方の気持ちでいっぱいになりました。

平野 その後は、熟睡……ですか？

ゆり 私がずっと同じ体勢だったから、足がしびれてきちゃって……びくつと動いた瞬間に、お客様がはっと目を覚まされたので、「おっきしたのお？」って聞いてあげました。心を許して安心しきっていただけなのが、本当に嬉しかったです。

平野 「おむ☆フェス」にちなんで、何かおむつに関するエピソードを教えてくださいませんか？

俊輔 何度かご利用して下さっているお客様からは「こつちのほうが安心感がある」「履き心地が違う」っていう反応があるんですよ。おむつの着心地の好き嫌いには人によって違うんだっていう発見が、最近ありました。ですので、それ以来、できるだけお客様が気に入ったおむつを用意するようにしています。

あとは、違う種類のおむつを持って行って「どつちのほうが好きだった？」って聞いて選んでもらうのもいいなっと思っていました。

平野 俊輔さん自身には、なにかおむつに対するこだわりはありますか？

俊輔 パンツタイプが好きなんですよね……その他にもおむつに関するエピソードは沢山あるんですけど……昔の自分のプライベートの話でもいいです

か？

平野 え。それ、聞いちゃっていいんですか!? 是非聞かせてください(笑)

俊輔 僕は、おもらしのときは、対面座位でトントンするのが好きなんですよ。

その日は、相手にお流腸を2個使ってた。そして、いつも通りにお膝の上で抱っこしてたら、大決壊しちゃって。

平野 えっ!?

俊輔 横漏れでジーンズがびつしゃびしゃになっちゃったんですよ。仕方がないので、そのジーンズは洗ったんですけど、すぐには乾かないので。

平野 ええっ!? それで、その後は……?

俊輔 濡れたままの状態で履いて、そのまま帰りました。夏だったから、家に着く頃には乾いてましたよ!

平野 大惨事じゃないですか!?

俊輔 あはは。今までプライベートでは、スーパー○ッグとかを使ってたんですけど、吸収量が少ないのでそんなことになっちゃったんですよ。それに対して、今お店で使っているのは安心感が違いますね。大人の赤ちゃん用の紙おむつは、そういうところがいいなっと思っていました。

——ちなみに、Bebesさんでは粗相しちゃったときに、おしりペンペンのお仕置きはオプションで可能だそうなんです。逆に、お尻ペンペンのお店ではおもらしをオプションにすることもできるけれど、使用する

るおむつはシンプルなものになるようです。コンセプトの違いによって、違う遊び方を楽しめる工夫がされているようです。

平野 ゆりさんにも、おむつに関するエピソードをお聞きしていいですか？

ゆり 私も、昔、自分で体験した話なんですけれど。車で渋滞したときにインターに寄れないとか、トイレにどうしても行きたいのに行けないとかいう非常に、おむつって本当に使えるのかなっていうのに興味があつて、実際に家で試してみたんですよ。

けれど、履いてみると、なんか結構ばつぱつぱつで。でも、一応ちゃんとおむつは履いたので、このまま時が来るのを待とう!と思って。そして、飲み物を飲んだりとかして。それからしばらくして、「お、来そう……」と思ったので、一応念のため、トイレのスペースに行ってみたんですね。

そしてその後、「おつ来た!!」ってなつたので、出したんですけど。その瞬間、まさかの決壊!!

平野 えっ!?! ゆりさんも、まさかの決壊!?!

ゆり おむつに染みた後の、脇からの漏れ出しがすごくて。しかも、おトイレを我慢していたのもあつて、量も多くなっちゃつて。おむつで大決壊したっていうことがあつたなっという想い出が……私のおむつに関するエピソードです。

平野 ゆりさんも大変なことに……

ゆり ですので、おむつ好きな方が「パットをつけると安心」とか「ビニールのテープタイプがい

い」という話をされているのはすごく和むし、是非BF15sに遊びに来て、そういうことを語って欲しくて欲しいです。

平野 おむつ好きな方と話が盛り上がりそうですね！

ゆり あと、ちょっと話は変わるんですけど………
姪が産まれてから、ずっとお世話をしているんですね。テープタイプの頃からおむつのお世話が始まって、今はパンツタイプなんですけど。赤ちゃんのうちって固形じゃないし臭いんですよ。けれど、そういうのも慣れてきたので。是非、お世話して欲しいなって人には、気兼ねなく来てもらいたいなって思っています。

平野 ちなみに、俊輔さんご自身にはおむつの経験はありますか？

俊輔 ありますよ。僕もおむつは自分でも体験してみようと思って、まずは流腸を1個入れてからおむつを履いたんですけど、その時は便意が来なくてだから2個目を入れたんですね。その時に「そういえば、ごみ捨てに行かなきゃな」ってことを思い出しちゃって。

平野 え、それってまさか……

俊輔 エレベーターで降りてる段階で、「あ、2個目を入れると、こういうことになるんだな」って実感がきちゃって。それでも頑張っごみ捨てはしたんですよ。それで戻るときは、結構本気で我慢したんですけれど。エレベーターに乗って、行き先のボタンを押して、ドアが閉まって……そしてふわって

浮いたときに、「あつ……!!」て(笑)

平野 出ちゃった……!?

俊輔 そう、全部出ちゃって、「これがお漏らしか!」って思いました。恥ずかしかつたんですけど、でも「これが好き」って言ってる子って、やっぱり愛しいなって、そのとき再確認しました(笑)

平野 お二人のこういった経験が、BF15sでのシッターに活かされていくのですね。ちなみに、普段、お客様とはどんなプレイをしますか？

俊輔 コースの中に色々な「セット」があるんですけど、僕の場合は「おあそびセット」が多いですね。けれど、僕の場合は「おあそびセット」が多いですね。

平野 「おあそびセット」ですか？

俊輔 絵本を読んだり、パズルをしたり。他には、お絵かきを一緒にしたり、お歌を歌ったり……

あとは、これは基本コースに含まれるプレイですが、一緒にごろんってして、ギューってして、ヨシヨシすることも多いです。

平野 どれも楽しそうですね!!

俊輔 ちなみに、一緒にしたお絵かきは記念に持って帰れます。この前は、「うろ覚え○○○○お絵描き」というのをしたら、すごく盛り上がりましたよ。

平野 ゆりさんはどうですか？

ゆり 私も、「おあそびセット」で、塗り絵、絵本の読み聞かせとか、シール貼りとかをよくしますね。塗り絵を上手に塗れたらご褒美にシールを貼ってあげたりするんですけど。「塗り絵を上手に塗れたね」のご褒美にシールを貼ってあげた後、「○○くんも貼る？」って聞いてあげたら「貼りたい」ってお返事があつたりすると、「じゃあ、貼ろうね。」

……ここに貼ったの。上手だね」っていった感じで一緒に遊んだりします。

——そのやりとりのなかで、「ちっちゃする？」みたいな感じでおむつを替えたりしてもらえそうなんですけど、だんだん慣れてくると、なりきってイヤイヤ期になっちゃう方もいるそう。おしっこが出てるのに「出てない」って言ってみたり。「温かいよー？」って聞かれても、「違うっ！」って言うちゃったり。でも、信頼関係ができてくるから、そういうやり取りができちゃうんですね。

平野 得意なことや、お客さんにしてあげたいこと、やってみたいことがありますら教えてください。

俊輔 おむつの交換なららせてください！
初心者さんは、「おしっことかうんちとか、汚いかな」って思っちゃうことがあるみたいなんですけど。僕は、おむつの交換は、小でも大でも抵抗なくできるので、全然大丈夫。気兼ねなく言って欲しいです。ちょっと恥ずかしいなって思っているけど、「おむつにおもらししたいな」っていう気持ちがあるのなら、それに最大限寄り添いたいです。

また、お店は「大人の保育園」なので、大人の赤ちゃんと受け入れますよというコンセプトなんですけれど。でも、おむつが好きな方で「おむつを履いている自分が好き」とか、「おむつにおしっこをしたくて、それを交換してほしい」という方ともお会いしたいですね。

あと、マイブームがお絵描きなので、是非一緒にし

たいです。どちらかという絵心はない方なので、これからお客様と一緒に練習していけたらいいなって思っています。

ゆり 声を褒めてくださる方が多いんです。それでも自分でも絵本の読み聞かせが好きなんですよね。小さい子の絵本って意外と感動しちゃうものってあたりするじゃないですか。そういうのって、思わず言葉が詰まらせながら読んじやいます。あと、声色を替えて読んだりするのも得意なんですよ。

その他だと、おむつをあててあげるのが得意です。テープをした後でも、指をちよつと入れてみて、「やっぱりきついかなくて」言ってみたり直してみたり。そして、最後に漏れないようにサイドギャザーのところを調整してあげたりします。

やってみたいこととしては、すやすや寝ちゃっている間に、おむつチェックをしてみたいです。「ちっちゃちゃつてるかな」っておむつを見てみたり。それで、線が出てるのを確認したら、寝てる状態で替えてあげちゃうつてのをやってみたいなって。そこで起きちゃつて「うーん」つてぐずられちゃつても、それも醍醐味かなつて。それで「濡れちゃつたから替えてあげるんだよ」つて言いながらおむつを替えてあげたいなって妄想しています。

——おむつネタは、シッターさん同士で盛り上がることもあつて、そういったお話をツイキャスで配信していることもあるそうです。Twitterで発信される情報は要チェックですね！

ゆり 履くタイプのおむつ……いいですよ。トイレでちつちつした後のおむつ交換のときに、私の肩に手をついてもらつて、「右足」「左足」つてわざわざ片足ずつ持ち上げて入れて、おむつをシュツて持ち上げたあとにパツと手を放して、「はい、できたよ」つていうのもやってみたくないですか……つていうことを、日々妄想しています（笑）

それから、「トイレトレーニングちゃんできたね。じゃあ、新しいのに替えようかって」いうプレイとかもパンツタイプのおむつでやりたいんですよ！
平野 妄想が止まりませんね。

今回は「おむつフェス」とのコラボレーションなので、おむつに関することをメインでお聞きしましたが、コンセプトは「大人の保育園」なので、実はおむつをはかなくてもお店を利用していただくことはできるんですよ？

美咲 「赤ちゃんとして甘えたい」というのもできますし、「大人として甘えたい」というのもできます。カウンセリングシートがあるので、どういった設定でどんなプレイをしたいかっていうのは最初に決められるんですよ。

そして、最後に連絡帳をお渡しするので、その日の様子を思い返すことができるようになっていきます。

ゆり 来てくださる方は、「癒された」という方が多いので、笑顔とかヨシヨシとかハグとかで最大限包んであげたいと思っています。

美咲 お店全体としても「癒し||リフレッシュ」だと思つていらっしゃるんですね。カフェでお茶をする、ドライブする、お買い物する、ジムで汗を流す。それと

同じように、赤ちゃんになることだったり、おむつをはいてみることもだったり、ペンペンだったり。リフレッシュの一つの形としてこういうのもあるんだよつて思つていただきたいです。

平野 しつかりとリフレッシュできたら、帰るときにはみんな笑顔になつちやいそうですね。

俊輔 笑顔……僕の場合は、恥ずかしそうかもしれない（笑） 恥ずかしかった……でも、癖になるかも……それもリフレッシュですね（笑）

平野 その他に伝えたいことはありますか？

ゆり 体型・年齢・体質（臭い・汗）などを気にさず来て店を躊躇される方がいらつしやるようなのですけれど、それを理由にこの楽しい時間を先延ばしにするのは勿体ないと思うので、是非気になるシッターがいればまずはTwitterからDMを送つてみて欲しいです。また、直接シッターにコンタクトが取りづらいうでしたら、お店に連絡していただければお手伝いしますよ。自分のコンプレックスをこここでなくせるんだよつてことを知つていただきたいと思つています。

「こんな歳なのに、バブバブしたいつていうのは、いいのかな」つて思つている方もいらつしやるみたいだけれど「それでいいんだよ」つてお伝えしたいです。

平野 今日は、長い時間ありがとうございました。

——実際に、お店を利用したい！と思つた方は、ご利用方法を次のページに記載するので、是非ご確認ください。



俊輔さん

最初は「緊張して話せないかもしれないから不安」って思っちゃうこともあるかもしれないけれど、僕はおしゃべりが好きで、お話を広げることには自信があります。だから、不安がらずに会いに来て欲しいですね。

来てくださったお客様は、がっつり甘やかしてあげたいタイプなんです。ごろんってして、ぎゅーってして、撫で撫でて、よちよちよちよちっていうのをしてあげたいです。ですので「初めてで恥ずかしい」って思ってるお客さんでも、僕が全力でお世話するので大丈夫。甘えたい気持ちを存分に満たしてあげたいと思います。

あとは、おむつはどんなに汚しても大丈夫!! 大に対して抵抗・恥ずかしさがあるお客様もいらっしゃるかもしれないけれど、僕に任せて甘えて欲しいです。

Twitter→@b_fles_shunsuke

ゆりさん

人と話すことがとても好きです。見た目もほんわかしていると言われることが多いので、お母さんを求めている方、母性に憧れを持っている方が、子供時代に戻ったときの気持ちになれるようにお世話してあげたいです。何も考えずに身を委ねに来て欲しいです。

あと、おむつをするときには汚れることとかは気にしないでいいですよ。おむつ交換は得意なので。誰でも恥ずかしい、緊張するっていうのはあると思うけれど、それをなくして時間を共有するのがシッターの役割だと思っています。一緒にいるときは、安心してその時間を過ごしてもらえるように、存在を丸ごと包み込んで癒してあげたいと思います!

Twitter→@b_fles_yuri



B'Fles～おとなの保育専門店～

HP→<https://www.b-fles.com/top/>
Twitter→@Baby_FLES

※B'Flesは大人の保育専門店になります。性的なサービスは一切ありません。

※18歳未満の方、高校生の方の利用はできません。

※その他の注意事項はHPをご確認ください。

カウンセリングシート	
・乳児 ・幼児 ・思春期 ・大人	
呼び方	お名前について
お暮らし	する ・ しない
お世話	する ・ しない
場所	おむつ ・ トイレ
ご飯について	
ミルク(哺乳瓶)	離乳食 ・ 持ち込み
食べさせてほしい	自分で頑張る
歯磨き	やって欲しい・自分で頑張る
・お風呂について	
紙パンツ	はく ・ はかない
髪の毛	洗ってもらう・自分で頑張る・洗わない
からだ拭き	やって欲しい・自分で頑張る・必要なし
お着替え	やって欲しい・自分で頑張る・必要なし
※裏面もご記入ください	

カウンセリングシート	
お遊びについて	
・おえかき ・ シール張り ・ ゆりえ ・ おうた	
・ アニメ鑑賞 ・ パズル ・ おままごと	
ごっこ遊び ・ その他()	
お勉強について	
・ ひらがな ・ すうじ ・ えいご ・ けいさん	
希望プレイの流れ(イメージ)	
下の数字をご記入下さい。	
足りない場合はご自由に書き込んでください。	
()	() () () ()
①甘えんぼ ②お暮らし ③ごはん	
④お風呂 ⑤お遊び ⑥お勉強	
その他ご要望	

～お店のご利用方法～

- ①まずはHPにアクセス。お店からの注意事項が書いてあるので、お問い合わせの前にしっかりと確認してください。
- ②HPに記載されている公式ラインからメッセージ(もしくはTwitterのDM)を送り、その後はお店の指示に従ってくださいね。

『おむ☆フェス7』アフターレポート (2021年11月14日開催)

第7回目のおむっ娘プチオンリーイベント『おむ☆フェス7』は、サンシャインクリエイション 2021 Autumnにて開催されました。簡単ではありますが、アフターレポートとして内容をご紹介します。

- ◆開催場所：池袋サンシャインシティ 文化会館2階 (Dホール)
- ◆プチオンリーイベントの『おむ☆フェス7』はDホールでの開催
- ◆参加サークル：400以上のサークル (おむ☆フェス7参加サークル7サークル)

開催当時は、ようやく緊急事態宣言が解除され、COVID-19の新規感染者も少ない日が続いてきた頃でした。

身近な様子では、少しずつ日常を取り戻しているように感じられる場面も増えてきましたが、やはり今後の先行きの不透明さを感じられたり、地方在住の方の都心への往来控えなどがあり、サークル・一般ともに参加できない方も多くいらっしゃったようです。

そこで、今回も「イベント参加サークル様」「イベント非参加サークル様」から、頒布物をお預かりして、委託(セット)販売をしました。

スペース間も広く取られており、ゆったりと交流ができたように思います。

また、スペース内に『撮影スポット』が登場して、皆様、撮影を楽しんでおられたのも印象的でした。

今後とも皆様楽しんでいただけるようなイベントにしていきたいと思います。



①合同誌表紙/蜜姫モカ様



②会場の様子



③おむ☆フェス準備会のスペース

おむ☆フェス7 エア参加セット (Aセット)

多額、おむ☆フェス7に直接参加されていないサークル様の委託本2冊(＋チラシ)セットです。18歳未満の方は購入できません。バラ売り不可。

おむ☆フェス7特別価格 **900円**

④おむ☆フェス7エア参加セット(Aセット)

おむ☆フェス7お土産セット (Bセット)

おむ☆フェス7特別価格 **900円**

⑤おむ☆フェス7お土産セット(Bセット)



⑥撮影スポット

(看板娘/ショタT督様、のれん/雛良様)

あとかき

①P.N ②サークル名 ③HPアドレス ④Pixiv ⑤twitter



**おむ☆フェス8開催
&
おむつつ娘PARTY!8**

開催、発行おめでとうございます！
今年も参加出来て嬉しいです・・・！！
今後の活躍も心から
応援致しております☆☆
コンドル

①コンドル ②こんどーる
④380163 ⑤Condor_s_s

『おむつサキュバスが住み着いて』
二人とも新オリジナルキャラです。
サキュバスのルチナちゃんが満緑(みつのり)くんの家に
住み着いて、満緑くんにお揃いのサキュバス用淫紋
付きおむつを穿かせてしまい…。

『妖精さんと一緒に』
私のいつものオリジナルキャラのエルザちゃんと、新オリジナル
の妖精ケータちゃん。
自宅でアイスクリーム食べておむつ姿で寛いでいます。

皆様、毎度お世話になっております。
『おむ☆フェス8』の開催を心よりお祝い申し上げます。
この度もカラーイラスト2枚で参加させて頂きありがとうございます。
ついに8回目！独自路線なジャンルながら、おむつ好きな
皆様のエネルギッシュな創作活動は素晴らしいですね！
これからも、このジャンルの発展が楽しみです。

シヨタT督

①シヨタT督 ④657971 ⑤T_Yasagure



**ねこみみシッター
シュージ**

サークルの看板モデル、ミシェル・カツマタ・
フェリクスさんの本業、ファッションモデル活動
の様子をお届けします。
おむつは機能的なだけでなく、その見た目
自体が可愛いファッションとして通用するもの
ですので、ミシェルさんはおむつがある生活を
前提としたファッション広報活動を日常的に
行っているのです。

まずは「可愛くて安らげる部屋着としての
おむつ」が普及して、ミシェルさんのいる
2120年代のようにファッションとして定着
させていきたいですね。

①シュージ ③<https://nekomimi-sitter.net/>
④50306 ⑤feline_babies



**おむ☆フェス8開催
おめでとうございます！**

合同誌への参加は久しぶりと
なります「小金屋 悠」と申します。
(おむつ界隈では
「さわたり はるか」の名前で
活動しております。)

イラストには自分の好きな物を
たくさん詰め込ませていただきました！
誰かの癖(へき)に刺さってくれたら幸いです。

①小金屋 悠 ②CHOCOLATE★PROJECT
④1379930 ⑤fire_cat18

おむ☆フェス8

開催おめでとうございます
3年ぶりにサークル参加です！
再度参加できるまでおむ☆フェス続いてよかった！
これからも続いて！

今年の合同誌は一果ちゃんにしました
和口リ、やっぱ好きなんだって

新刊のテーマはおむつ学校の『健康診断』です
メインのキャラクター2人にしたので
いい感じに比較したいなと思います

初期案は服装と
設定が逆でした⇒



サークル：幼海エーリアン
うみノ爬虫類

①うみノ爬虫類 ②幼海エーリアン
④12366173 ⑤umityanADS

@CashuAbdl

生きてます。

すみません、挨拶間違えました。
夢にまで見たおむ☆フェス参加。
締め切りに追われるのって
モテる男みたいでいいですね！！
つらい！！



①Cashu ④58055420 ⑤CashuAbdl

おむ☆フェス8 開催、 おめでとうございます！

初めて漫画を描いてみました。
色々大変でしたが、
楽しく描くことが出来ました。

たく@スパイラルクリーム

①たく ②スパイラルクリーム
④69298569 ⑤SpiralCreamTaku

やあ。今回も「おむつつ娘PARTY!」に
おじゃまさせてもらいました。

いつも迷惑かけてごめんなさい。
そうそう。おむつのテープタイプが
いいかパンツタイプがいいか、の
おはなしなんだけど、まあ、結論と
してはどちらもいいものなんです。
だっておむつだもん。

そんなわけで

「おむ☆フェス8」
開催おめでとうございます



瑞光ちのん 拜

①瑞光ちのん ②はだあしや ④145724 ⑤tinonn

2度目まして。日向あおいと申します。
今回はちょっと本性出してみましたw
シチュエーションが行方不明な感じ
ですが、こういう事が行われている
地下に潜ったショー？みたいなイメージ。
合同誌の中では浮いてるような気も
しますが、こういうのが好きな人も
いてくれるといいな…(´・ω・`)
尚、普段はこういう感じのCG集を
メインに活動しておりますので、
興味を持たれた方は是非。
それでは、ありがとうございました。
(ペッコリ45°)

①日向あおい ②B-DASH JUMP ④1935432 ⑤ahOi

祝！第八回おむ☆フェス開催

皆様こんにちは、God Hand Marです。おむ☆フェスが
8回目の開催を数えました。末広がりな8。昨年の7に
続いて縁起がいい数字ですね。昨年のあとがきで今年こ
そは参加して盛り上げるぞと意気込んだのですが、拡大
の一途を辿っているコロナと年始から始まった不調によ
り今回も参加を断念しました。せめて一般参加だけでも
したいところですが、日々の感染者の推移を見ていると
それも難しそうです。昨年の様に開催日直前で急激に収
束してくれるといいのですが。

さて、今回のイラストは独自設定である乳和園という
施設で行われているお仕置きの様子を描いてみました。
これまで描いてきた乳和園関連のイラストでオシオキに
類する作品が無かったので、設定を深めるという意味も
込めて描いてみました。ゆりかご内でお仕置きされてい
る様子なのですが、ゆりかごの特徴を捉えきれなかった
せいで浴槽に見えますね。画力がもっと欲しい…

①God Hand Mar ②God Hand Mar
④1435719 ⑤God_Hand_Mar

ご無沙汰いたしております、ラッセルヘッドです。

今回は「きたない君がいちばんかわいい」の二次創作です。あのエンディングの後で、生きてる展開にするのは賛否あるかと思いますが、そのあたりはお許しただければと。

あと、今回もまた主催の平野様には多大なご迷惑をかけいたしまして、誠に申し訳ない限りです。

ラッセルヘッド拝

①ラッセルヘッド ⑤russellheadd3

前に一度、悪役令嬢の話を書いたら、思いのほか良いなと思い、今度はおむつで書いてみました！「高貴」で「ずる賢そう」な悪役令嬢が、実はおむつつ娘でしたとか、最高のギャップだと思うんですね！気に入っていただけたら嬉しいです！！

暫く停滞しちゃってますが、おしっこメインのRPG作ってます、ピアドです。

ちょっとずつイベント絵は増えていまして、最近おねしょを実装しました。その内、Ci-enでも色々情報出したいと思ってます。

<https://ci-en.dlsite.com/creator/1418>



①ピアド ④877149 ⑤isima_taku

ぺるちえ改めでんねこです。多分8から9年ぶりでしょうか。(手元のおむニバスを見)

実は今回、どっちのハンドルネームで寄稿しようか迷いました。隠していた性癖がモロバレになるのは恥ずかしいものがあったので……でも分けるのも面倒なので、今後はでんねこ名義で色々寄稿できたらって思ってます。

宣伝：VRでも履ける紙おむつ『Open diaper』これのお陰で今回作品が書けました。

①でんねこ ③<http://mousouplot.blog.fc2.com/>
④3537343 ⑤de_denneko

おむつつ娘PARTY!8に参加させていただきありがとうございます
また参加できて嬉しいです!

そうそう最近おむつブームがきています自分の中でFanboxとCienでおむつ物の新作公開中ですので是非読んでみてください

今までの既刊とか詳しくはついったーからどうぞ(@kobayasiyuuri)

(ついったーは酒飲んでるか歩いてる写真ばかりですが…)

しばらくおむつ物中心になっていくと思いますのでどうかよろしくお願ひします!

Appixivリクエストとかも受け付けておりますのでそちらも是非是非

①小林ゆーり ②Bar Zilber ③<https://barzilber.fanbox.cc/>
④18476058 ⑤kobayasiyuuri

**コミックマショウで
オムツばれ漫画
描いてますので
そちらもよろしく
お願いします**



①ジョン・マロ ④14598663 ⑤culimaro

①蜜姫モカ ②Teamはれんち ④58815 ⑤Mituhiime_G
③<http://58niconico.web.fc2.com/>

はじめましての方もそうでない方も、こんにちは！
平野月子です。最近、新しいジャンルに手を出し
はじめたら、「謎のエージェントやってる人」って
言われてしまいました（笑）どうも、謎のエージェント
やってる人です。どうぞよろしくお願ひします。

今年は何度か、他の同人イベントにも一般参加で
遊びに行く機会がありました。去年に比べると、
随分、人出が戻ってきた印象です。このまま、全体的
的に活気が戻ってきて、流行り病な心吹き飛ばしてく
れー!!!!と切に願ひておひます。

今回のおむ☆フェス8は、ハロウィンっぽい感じのテ
ーマにしてみました。ちょっと気が早かったでしょう
か？

また次回も皆様にお会いできることを願ひて!!

①平野月子 ②Sugar Baby
④9757041 ⑤hiranotsukiko

もともと
絵を描くことに対して
コンプレックスの塊
だったのですが、
最近、
ちょっと楽しく
なってきました。



①雛良 ④2236047 ⑤sula_twi

おむ☆フェス8プチオンリーのねん



イラスト:雛良



編集後記

こんにちは。平野月子です。このたびは、おむ☆フェス8開催記念合同誌『おむっ娘PARTY!8』をお手に取っていただきありがとうございます。

最近、「おむっ作品」をかける作家さんや、「おむっ写真」を撮影されるモデルさんを見かける機会が増えてきたような気がします。きっと気のせいではないはず……!! 『おむ☆フェス』や、『おむっ娘PARTY!』をきっかけに興味を持ってくださった方がその中に居らっしゃるのであれば、嬉しく思います!! また、今までもずっと「おむっ」が好きだった方が、もっと好きになってくださるのも、もちろん嬉しいです!!

感染症対策をしながらのイベントも、今回で3回目となりました。正直、こんなに長引くとは……という気持ちもありますが、それでも、毎回一歩ずつ何かが前進している気がします。次回はもっともっとパワーアップしたイベントをお届けできればと思います。今回は9回目ですが、実は10年目です(笑)こんなに長く続けられたのも、支えてくださる皆様のおかげです。

いつもおむ☆フェスに参加してくださっている方、今回、初めてこの合同誌・イベントに参加してくださった方、おむ☆フェスを通しておむっ娘というジャンルを知ってくださった方、そしてこの場を提供してくださったクリエイション事務局の皆様。今回も多くの方に支えられてこのイベントを開催することができました。このイベントが皆様の新しい出会いへの懸け橋となれば幸いです。このたびも、『おむ☆フェス8』に関わってくださった、支えてくださった全ての方に、感謝の気持ちを込めて。

奥付

■誌名■

「おむっ娘PARTY!8」
おむっ娘プチオンリーイベント
おむ☆フェス8開催記念合同誌

■企画・編集・発行■

平野月子 [おむ☆フェス準備会]

■おむ☆フェス公式サイト■

<http://omufes.web.fc2.com/>

■「おむっ娘PARTY!8」特設サイト■

<http://omufes.web.fc2.com/omparty8/>

■発行日■

2022.9.25

おむっ娘プチオンリーイベント「おむ☆フェス8」
(サンシャインクリエイション2022 Autumn内開催)

■印刷■

オレンジ工房.com様

おむつつっ娘PARTY!8

おむつつっ娘プチオンリー『おむ☆フェス8』開催記念合同誌

